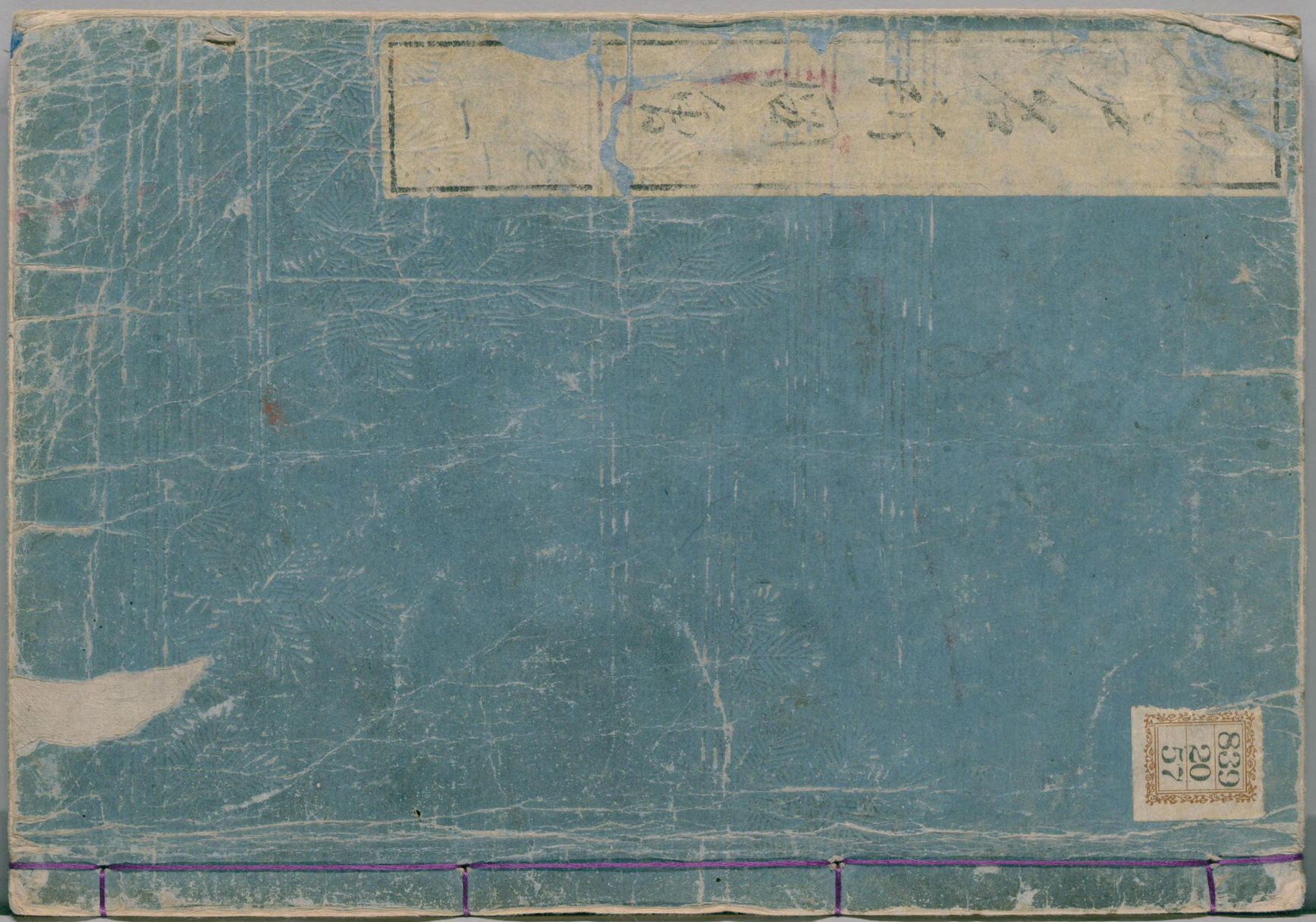
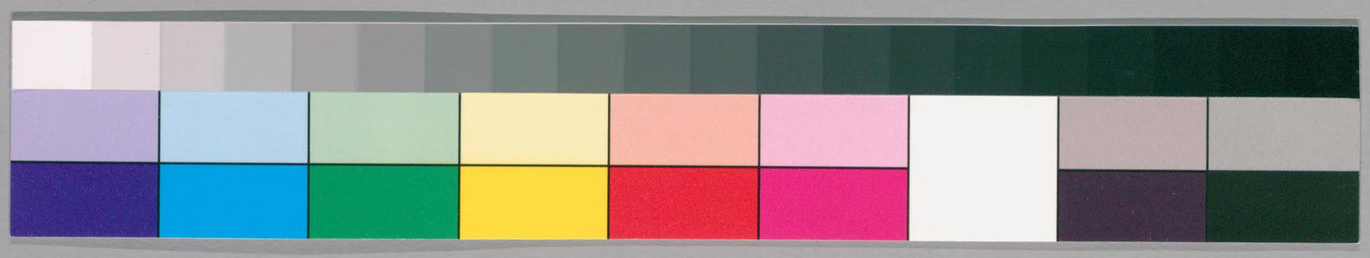
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』請求記号 839-57
ガラス使用


839
20
57



東都名所圖

松濤軒長秋繪
七葉山川雪旦圖畫

都名所圖會始出遠在余成童
時一閱之即謂此可以供卧游
矣則江戸亦不可無是輯也後
數歲聞諸西山大久保翁有藏
藤幸雄者有採擇稍遍描寫顧
戸名所圖會採擇稍遍描寫顧

曹山文庫

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

盡然獨病江戸稱名所者僅僅不足傳也余謂凡名所之稱本出於咏歌者流蓋其設法謹嚴畫一縱令有山秀水麗足以吟咏而其不爲古歌所取者不得稱之名所是其所以雖世有汙隆要不失爲雅馴也然名者實也實者主也主豈可以賓加損焉哉矧秋里氏之撰非惟所謂名所而已神祠佛寺說像牝誕粛陌綺街事涉猥瑣者亦網羅而不遺乎矧復江戸之爲地

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

武野之曠秩嶺之峻瀍洛之永
玉川之澄絡繹邦域霞關思嶌
之宜春真土菴崎上國乎是亦
郊坰其勝殆不讓上國乎是亦
何病之有翁頷而是之既而幸
雄沒翁亦尋逝終不知其成否
然而秋里氏所著拾遺輿咊河
泉攝及一二諸州名所圖會者
陸續上梓盛行於世余於是乎
悵然恨牽雄之輯慾期失時而
又聞其男幸孝善追其志再校
三索覓聚滋廣猶未公於世幸

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

孝亦以文化戊寅沒又遺托之
男幸成幸成泣受之黽勉不怠
校讐極力竟竣其功閒者幸成
突然抵門通刺出其全帙示之
且需序言是蓋由余注日介人
促其成也余乃一閱三歎追念
與冏山翁言三紀於茲喜悲交
集又憾幸雄幸孝之與冏山翁皆
不觀其完成矣然其所以歷年
若此其久者敬慎遺托不敢輕
舉則死者而有知必曰予子若
孫相續能成吾志矣抑畜會之

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

撰固供卧游亦以充童觀非所
以專示大方若夫覽者尤其不
雅則則可謂不知類矣余更為
作者分疏其由云天保三年閏
月冠山松平定常謹撰

河三矣書

海内地名著於古人和歌者宗祇
濳月之徒攬而輯之稱之名所川
之險易風俗之淋悪名物之同異
可尚而識也吾江戸名所顯於古人
和歌而晦於當今者不少矣為應
川湖布著於延喜式霞関載於
武蔵風土記扨魚井兼於紀貫

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

之僧西行之歌。皆名吟之顕於古
而今失其蹤者也。及考古之士。遍
而訪之。林鑿再啓其岡焉。泉石
再煥生奇焉。我無勝情者則不
能也。蘚藤葦雄勝情矣。有
勝区名。従葉於楪
徴具矣。江戸勝区名。従葉於楪
叢竺墟之冒。而采可識名。捜経
谷。披窮林。或訪之古老。或徴之
断碑。又自史傳地誌。諸書名所
和歌紀行之書。以及稗説野乗。
苟有足以資考鏡者。必博採
総括。蘭舊於澡論不可尚之蹟
焉。其名吟則著之繪事。收山河
於お又幅。駆萬象於筆端。亦可

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

以當卧遊矣。於是百幸溧梅之徐一區。英雄百代之芳躅。粲然而復炫其奇乎。所謂物以人貴者矣。未及策畫。遽疾而逝。識者惜之。嗣子韋孝克纘先緒。補之闕。余先人與韋孝締交已久。

矣。嘗約爲之序。而未果。韋幸不永。亦遂忘繼而捐館。嗟夫韋孝胡爲哉。稟於性者厚。而享於年者獨薄。殊不然痛惋也。及乞米策。能承遺誡以一人而任二世之編纂。卷帙兒繁。採摭亦博。而補輯悉審。契勘必當。始克成斯浩瀚之編。乃聿脩

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

る人。逝去無憾矣。乃走不徴序於
余。叮嚀云。余先人嘗簒。蓋八稔矣。而余
薄技浪代。先人之仕大方之誚。
固所不免也。天保癸巳春三月
江戸　龜田長梓謹識
牧野信之印

ひつかぶの古てつとのるふこと（ま）勢ふ
のう法ゆまくふつまくふ心ぶま）海あ秋
らしんあ〜ぬいをれあるれ〜人風こよ
ゆあ法ゆまの巻れとそ〜大堤のうよ
もひとつまおよそ子すとのいひをん法
るへきされもむう〜ようをよきこと
おのつ〜ちこれなりゆきあるへゆう
我ゐ形をなるゐる市人のもそみこう
な生てあまるの世を巻く妙後よい
ぬれるとのつ〜あ〜ぬれむきふな
まれいつ〜ぬこと南ゆかそ〜法ろ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

凡例

凡此編の次序ハ　大城を以て首とし　除ハ東方より回環する
地北斗七星の位ふ配當ふて都て七巻とふて全部ふ
凡江戸の地ハ廣大繁壮ふして名流高士の芳蹤ハ蔚然と
して史冊ふ照曜し　琳宮梵刹ハ林の如く聯りて悉く
皆ふ遺る　故ふその中ふも由致ひるを擇て録ふ或ハ
亡ひて證とふ足ら無ハ土人の口碑ふ存するのみを取て證
ふ　或ハ古根の浮説ふて言妖妄ふ渉るものハ之ふ省く
怨りと雖人口ふ膾炙して傳称の久しきハ今猶ふ添削
評騭を加ふる能ハ之ふ従ふて姑く之ふ載ふ且小祠支院の類
来歴事実を亡失ふて詳ふ考ふる事能ハ之ふ闕きて攷古博物の士ふ俟ひ
他日後輯の成るふ及ひて附載せんと欲するのみ

凡方位を示すハ茶位を備ふて某の東西南北を莊りと標注又左右とハその地よりむかふとするを後の左右と云覧るものゝ為也

一 図中に用の書全文を載せすして摘まるゝハ紙数多きを恐るゝ為なり況ハ社佛刹ハ諸什器の類神奇附會ハ渉りて玉贅決すへうさるハ社司寺僧の言ひ伝ふる所ハ任せて記せり又武家風土記の殘編ハ備書ありと雖古来より世よく覧る人の意ハさるを用ひその取捨ありて覧る人の意を圖ふへきなり

一 凡神社佛閣の幅員方域を圖ふへきハ勿論なれとも其遊観の形勢を繪ふハ甚難し況ハ其態度風俗彼此容儀ありて永歳今の形容を舊地ハ基て画するの八各時を分てり是を地の風光を圖ふて第一の勝槩とハ云ふ為なり

一 凡此地名所の中武蔵野隅田川二条ハ記せり西岸ハ芙蓉峰雲間ハ肇へ東岸ハ筑波の翠巒晩霞ハ顰へて山水の風致備りり縦観の美き地ハ停まるハ依て其巻ハ其巻を對照してその全局を知るへし

一 凡真間の舊蹤ハ下総の地ハあれとも利根川を隔つるのみならず武蔵ハ文人墨客吟筐を頁ひて游邱を曳くりハ其業集以降ハ芳蹟多り且第一の壮観とハいふ於て縁舎志の例ハ倣ひて倭せ記せり此ハ内ハ收め覧るりハ其まゝを縁せよ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

附言

此書ハ祖父ゟ寛政中ゟ編ミ初メて父縣麻呂ゟ刪補文化の末ふもとて
なゐと文政の今ふもて上梓の功を終るゐ凡年序を経るゐ三千有余年
江都蕃昌ふ随て神社寺院境地沿革するゐの頗多ゐ一向の小祠も
須臾ふ壮麗ゐる大社ゐゐ多を纔の艸菴も巍然ゐる荘厳をゐゐる
ものふゐゐゐ盛ハ祝融の災ふ罹りて擾門田廊と焼失ゐ礎石のこ
存ゐの類無慶枚挙すんゐゐ然りとゐへとも時ゐ変を改ゐ旧観
あゐよ今時の称よ差ゐるの多ゐ一見るりのいふゐるのみ

齋藤月岑識

豊山文庫

江戸名所図會巻之一

天樞之部目録

武藏國號基　日本武尊稼父岩倉ふ武器を收ゐ圖
江戸始元　御城興基
元旦諸侯參城号　吹上御庭
八代曾河岸　龍の口　平田明神蒲生雜掌守宅地
紺屋橋　常盤橋
天正御祓所　大傳馬町　小舟町
深世小路　十軒店　同雛市
福田村舊址　白雜稲荷祠
本銀町土手　今川橋　至水神下谷根岸
護持院舊地　荒溜　鰻掻橋　同所
田安屋敷　飯田町　中坂　九段坂
一石橋　橋一覧図　檜木河岸
通町　大傳馬町二丁目呉服店本町藥種店
本石町時の鐘　雉留　伊勢町東河岸　同堀河岸
子代田村舊跡　子代田稲荷祠
神田明神舊地　神田鍛冶町平永町代地　同所
今川橋　至水神下谷根岸
荒溜　鰻掻橋　同所
小川町基　神田川
飯田町　中坂　九段坂
藥土明神舊地
道三橋　日本橋　同魚市
小川町基　神田川
飯田町　中坂　九段坂
藥土明神舊地
道三橋　日本橋　同魚市

氷道橋　駒込吉祥寺田地
二橋稲荷祠
昌平橋　湯島坂
大名田服稲荷祠
藍染川　類焼
茅師
稲荷
祠
柳橋　茅町
駿河臺
神田川
雜魚橋
於玉ヶ池　於玉稲荷
馬喰町馬場　東御繪所
両国橋
清水如舟宅地　大門通
吉原町田地
江戸橋　水更津
天王御旅所　同御祭禮
三派
中橋
永田馬場　山王御旅所の図
俳仙某角翁宅地
三ツ橋
霊巖島　霊巖橋
永代橋
洲崎
茅場町薬師堂
観来先生居宅地
随見庵浦
薬師堂橋本稲荷社
半井卜養翁居宅地
筋違橋　八小路
丹後殿前
柳原封疆　柳森稲荷
鴻巣
森稲荷社
加藤出羽守屋敷
田町
土手通
土手町
鑓の渡　鑓の瀬
駿河臺
筋違橋
丹後殿前
柳原封疆　柳森稲荷
鴻巣
森稲荷社
加藤出羽守屋敷
田町
土手通
土手町
鑓の渡　鑓の瀬
茅場町薬師堂
観来先生居宅地
随見庵浦
薬師堂橋本稲荷社
半井卜養翁居宅地

弓弦葉神社　天満宮
江戸名所図会　巻之七
江風山月樓　東叡山
東叡山
東叡山

三田　綱坂　産湯水　綱塚　目黒坂　狗繋松
春日明神社　月波樓　小山神明宮
功運寺　濟海寺　三田八幡宮　聖坂
飛塚　迴向先生墓　竹葉寺舊址　同古事
行四天藥師堂　半小屋　魚藍觀音堂　洲見坂
高輪六本　泉岳寺　言輪大木戸　七月廿六日祭禮之節
稲荷祠　常光寺　如来寺　卵塔　太子堂庚申堂
高山稲荷社　東禪寺　有名寺　寶珠寺　子安觀音　乘寺天
八幡宮　釈神社
谷山

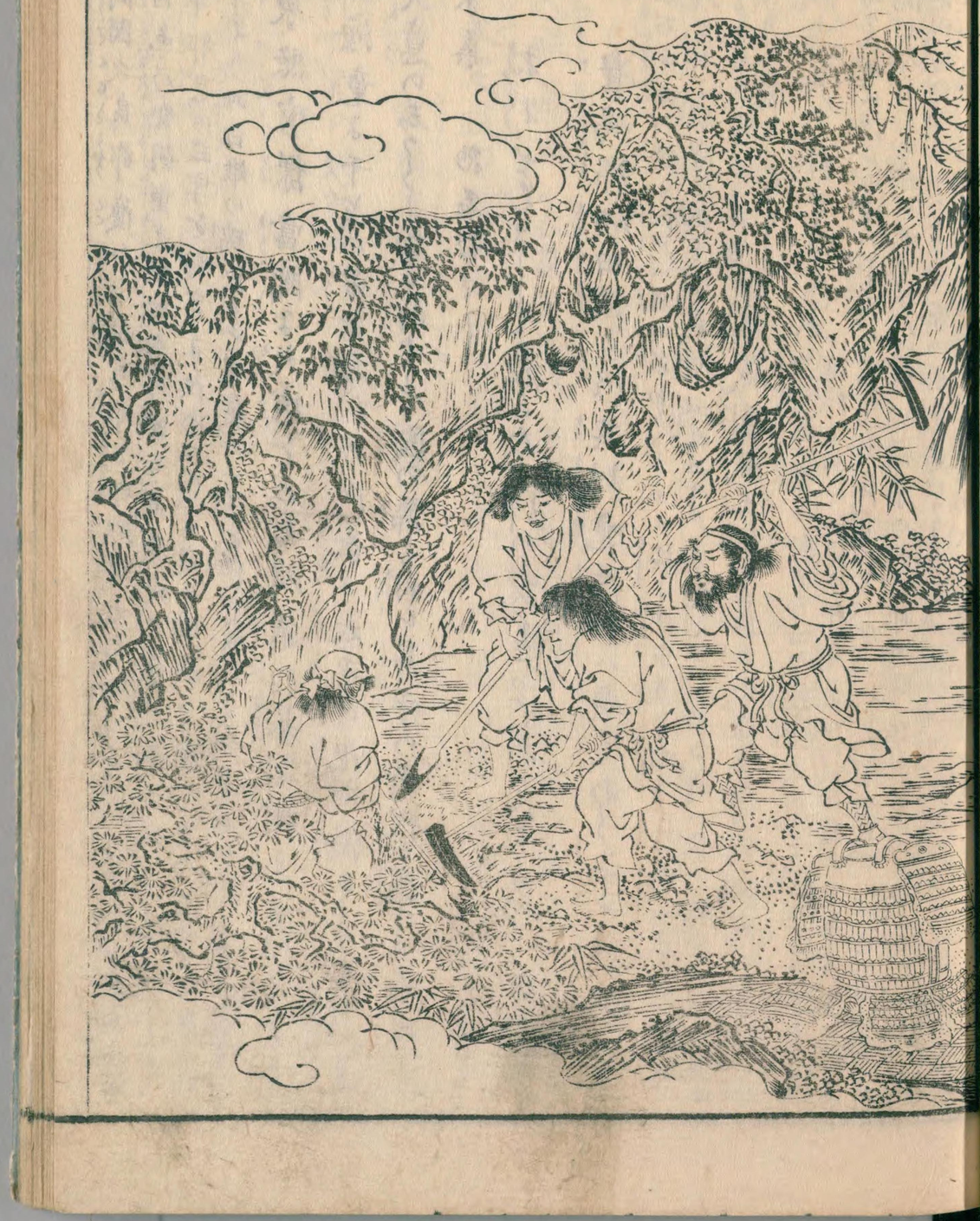
武藏　東海道ニ屬セ和名類聚抄曰牟佐之國府多磨郡ニ在ト云
武藏國上古ハ東山道ノ内ニ入ル光仁天皇ノ宝龜二年辛亥冬十月己卯
大政官奏シテ東海道ニ屬セシムト　續日本紀ニ見ヘタリ
橘樹　荏原　豊島　足立　新座　入間　高麗　比企　横見　埼玉　大里　男衾
幡羅　榛澤　那珂　兒玉　賀美　秩父　葛餅等以上二十二郡アリ
那珂等ノ三郡ヲ加ヘ葛飾ヲ除テ此四郡トセラル貞享二年丙寅三月利根川ノ
西ヲ割ク武藏國ニ屬セシ昔ハ本所葛西ノ邊淺草ノ川ヲ國界トシテ川ヨリ東ノ地ハ
一圓ニ下總國ナリシヲ古ニ今ハ葛飾郡ノ半ヲ割ク利根川ノ以西ヲ武藏ノ國ト
葛餅郡トス此東ヲ下總ノ國ノ葛餅郡トス和名抄ニ武藏國管二十一トアリテ葛餅郡ヲ
今是ヲ加ヘテ二十二郡トセリ和名抄葛餅ヲ加止志加ト訓ヲ同書ニ多磨モ多波ト訓ス
古事記年邪志ニ作ル舊支記胸刺ニ作ル萬葉集ニ年射志ニ作ル同クムサシト称セ
其義ハ風土記抄ニハ武藏の國秩父の嵩ハその勢ひ勇者の怒り立ラ
ヤ一日本武尊此山ニ東夷征伐の祈願をこめひその後東夷盡く平治
せしかばその武器を秩父岩倉山ニ納やめよりてこの國をむさしと称せしと
なり其後　称徳天皇の神護景雲二年武藏の國より白雉を献ル公
卿の奏せし言ニ武武崇文の祥多しとよりて此國を武藏の字を以嘉名とせしと
續日本紀称徳紀云神護景雲二年六月癸巳云云武藏國橘樹郡人飛鳥部吉志五百國於

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

日本武尊東夷征伐の時武具を秩父岩倉山ふ收めよ是武藏國号の濫觴なり

倭健我容猛
征西又伐東
腰間十束劒
草薙偃威風

春齋子



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

同國久良郡獲白雉献焉即下郡郷議之奏云雉者斯良臣一心忠貞之應
白色乃聖朝重光照臨之符國号武蔵既呈戦武崇文祥一とあるハ
年郡志の三字を好字よ改め二字よ定め武蔵と書て志の文字を畧れ
しより此白雉の瑞ふつゝそ武蔵の二字を祝して奏しる詞より今の名ありもてことあり

東照宮様當國よ大城を築き鴻業の基を開きたまひしより
四海竟よ干戈の労を忘れ万民長よ太平の化ふ浴もてるを乃是
天意のあらゝむる所ゆゑ國の隣も自ら昇平の御代ふ應しるあるべし

家集　拘名むさし

枕木せむさゝゝて暮よあらゝのこの遠ゆそあとふとゝめつ　拘本人丸

江戸　豊嶋郡峡田領よ其封境往古ハ廣くあるに似たり

白石先生の説よ江戸ハ庄の名なるべし云云按よ中古庄と唱へしハ郷
郷里共よ佐登と訓ゑ令義解云凡五十戸為里と云く然る時ハ佐ハ狭登ハ処の畧ふ
して廣大なるの意ふ武蔵國風土記よ荏土ふ作る傳云此地ハ大江よ臨
とりて云るべし

故ふ江戸と称せりとぞ　甲陽軍鑑よ江戸の
経記よ云く江戸太郎重長ハ八箇國の大福長者とあり

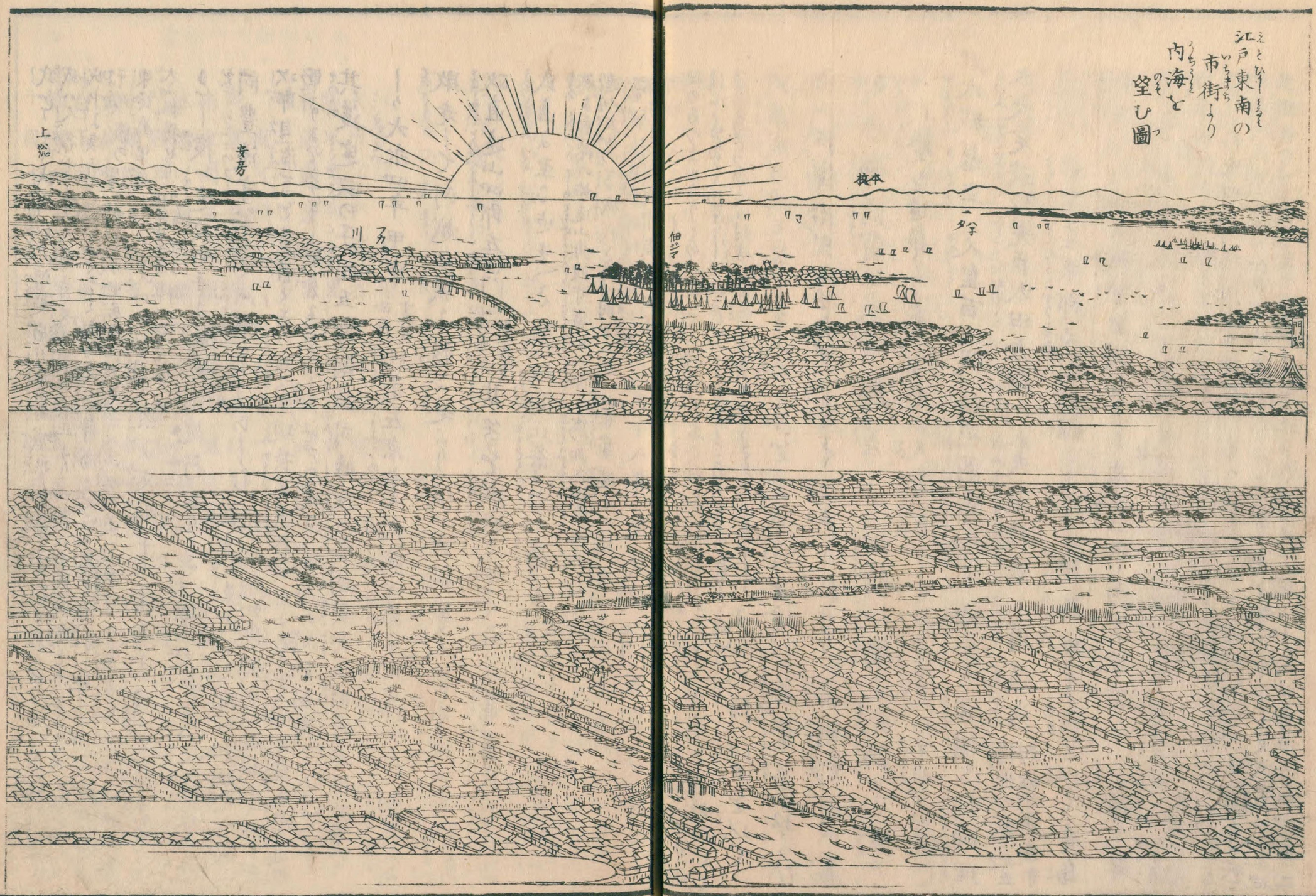
ある時ハ江戸の地ハ千頃あるべく重長領せしなるべし南向亭ハ平川一水を
隔て今の三の丸の地ハ江戸の郷日揃寺の方ハ神田郷
飯田町の下よりつゞく入堀の水脈是なりと又同一説よ今の御城の
辺よいたる迄ハ江戸と唱へしなるべし

御城の号よ呼れしより彼地の惣名とする江戸の
枝のあらまほしくむさゝゝの江戸よつゞきありとあるも上の意よ
ひとしうそのゝ八の封域今のあらゝむを考るべし　天正己降江戸を以て

御居城の地となしゝより故ふ日を重ね月を追ひ益繁昌ふ加へ
今ハ経緯拾里よ亘もて都べく江戸と称せり　萬國列侯の藩
邸市廛商賈の家屋鱗差して縦横四衢よ充満し万戸
千門甍を連ねり実ふ海陸の大都會ゆゑ扶桑第一の名境とぞ

江戸大城基立　人皇百三代後花園帝御宇鎌倉の官領上杉修理
太夫定政の老臣太田左衛門太夫源持資入道道灌
の条下ふ詳なり　當國荏原郡品川の館よありしを
郡江戸の地よ城営を開むとし康正二年丙子経始し長禄元年
丁丑巧成べく道灌こゝよ移り住を
持資相継べく居城となすとぞ　江戸名所記等の説よ父資清入道
四月上杉修理太夫持朝入道武州河越の城を
取立同左遷太夫ハ江戸の城を取立こゝるとあり是を證とすべし又一
宝田祝の里といふ地よとゞまりて又一説よ千代田育田宝田等の三

江戸東南の市街うち内海を望む圖



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

氏を[illegible]武州江戸と河越岩付の小城[illegible]築[illegible]むとありて一[illegible]弐八地名[illegible]或八人名[illegible]す太道寺支山翁云天正[illegible]来ハ千代田城[illegible]と[illegible]城中よ[illegible]所の室[illegible]軒の南を静勝軒[illegible]と号く東を泊船亭と呼び西を含雪斎と[illegible]其昔持資[illegible]城中[illegible]の拡[illegible]よ應く万里居士江戸城よ入山水の美を眺望一窓含西嶺千秋雪一門繋[illegible]東吳萬里舟をとゞめ古人の詩を引て然よ文明十八年丙午持資謚害せら[illegible]大よ称揚せり[illegible]文中[illegible]詳なり

[illegible]後ハ定政の手よ属を依執行なりて

同豊後守をして此城を守らしむ

次郎自滝野を竜[illegible]置とあり按よ[illegible]頃長尾景春武州よありて兵を催を道灌戰[illegible]鎌倉大草紙よ文明九年江戸の城に[illegible]其後定政の子同五郎朝良同修理太夫朝興共よ相續て此城[illegible]

[illegible]大永四年甲申四月十三日北条左京太夫氏綱[illegible]攻落され朝興大ひ

敗走して河越の城よ移る是より後ハ氏綱家人富永神四郎[illegible]

政直遠山四郎左衛門小田原記[illegible]

氏直よ至る迄[illegible]四代の間北条家よ属す

然よ永禄の始遠山丹波守富永三郎左衛門両人北總國府臺よ戰死[illegible]

遠山左衛門尉城代[illegible]同十八年北条家滅亡の頃遠山左衛門佐景政を小田原よ

竜城[illegible]其弟河村兵部少輔[illegible]

同郎遠山丹波守嗣城を守る天正十八年庚寅秋七月[illegible]

其家没落せ[illegible]

[illegible]聞遠山富永両家[illegible]代[illegible]

是を衛護を諾城変迄録は遠山丹波守直景城代とあり北条治部丞

[illegible]頃ハ北条家[illegible]

より已来永く

御當家の御居城と定さ[illegible]れ同年八月朝日江戸の大城へ

台駕を移さ[illegible]其頃迄を僅をかりの城営[illegible]慶長年

間御城廓の地を廣[illegible]ひ唯今のやく巍然として萬世

不易の大城とハなりける

江亭記　武州江戸城静勝軒詩序

寄題江戸城着太田左金吾固一世之雄也威愛相兼三之才公内于公州城之安係于武州之一人夫州城之危係于海陸之公才八州内于公命者

元旦諸侯登城之圖

藩邦玉帛此朝宗
關險何須百二重
四海通舟渤澥
中原嶽秀有芙蓉
城地日暖晴雲遍
郊第春分淑景從
回望鼇蔥佳氣裡
車如流水馬如龍

服元喬

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

物斯遊斯則一日早着雖互出如更南名一年泊舩西名
耳以故軒之南名靜勝之興名泊舩西名
以此地同此景摘以爲名在公章被於天下其名謹傳
村巷靈彦
閭野閣青丘
茶晴碧海望蓬萊
樹來我苑無期
泊舩處關心西嶺
雪成堆堤
景蓮
帆多載詩
兵鼓聲中築受降
去吹雪士峯晴墮江
傳聞靜勝軒中景
天晴海望蓬萊南
帆似自平蕪過漁
火如從遠
籍々威名關以東又知天下有英雄
靜驅使江山入彀中
江戸城高不可攀我公豪氣甲東關
雪收作青油幕下山
雲連雪嶺水連吳城上軒窻閑畫圖
日碧天低野入平蕪
蕭菴龍統
三州富士天邊
黙雲龍澤
鼓鼙不起遑城
補菴景三
留行地
公乃吟中一風流尓聽傳
以村巷同由幼至光鴻藻片言章被於天下其名謹傳
二予日我未嘗東遊奚以得指于室俾辭幸關于左人歌之翁述以告之蓋
亦有年矣丙申夏適介人請詩欲需翁題詩其上者言之蓋
序可也予退讓弗允蓋予之序乘韋也翁之詩與跋以
吳暴也遂以所聞見者次而爲之序文明八年丙申跋
八月羣玉峯頭蕭菴龍統
物斯遊斯則一日早着雖互出如更南名一年泊舩西名
耳以故軒之南名靜勝之興名泊舩西名
合出而其背矚之可分皎如岡着巒着紫天之近而所之霞之晨可瀛東如岡着巒着南者旅地大之小所之獻腰田也旁遠南野呈而薰而風所水波風之曙去有常曙之河足今颯出秋西呈馬千公息
舍着與公之非一能缺於躁不躁窮躁則氣則清着與域寒而盈而非而冲非而不冲而其不正能後無也勝如淨爲克爲成杜戶政輿元化瞑幾氣然目於之至茶橋漁之環而陂溫波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
雪也公之非一能缺於躁不躁窮躁則氣則清着與域寒而盈而非而冲非而不冲而其不正能後無也勝如淨爲克爲成杜戶政輿元化瞑幾氣然目於之至茶橋漁之環而陂溫波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
泊其相以盈偏勝寒而靜則氣則清着與域寒而盈而非而冲非而不冲而其不正能後無也勝如淨爲克爲成杜戶政輿元化瞑幾氣然目於之至茶橋漁之環而陂溫波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
松不爭所非而守而偏而其不正能後無也勝如淨爲克爲成杜戶政輿元化瞑幾氣然目於之至茶橋漁之環而陂溫波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
者知而冲非而不勝雖合歌而詞和常爲聚之房之際到風城旁遠南野呈而薰而風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
浣爲相偏而其不正能後無也勝如淨爲克爲成杜戶政輿元化瞑幾氣然目於之至茶橋漁之環而陂溫波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
花着戰於着軒無也勝如淨爲克爲成杜戶政輿元化瞑幾氣然目於之至茶橋漁之環而陂溫波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
花成着軒未不所唯熱躁爲克爲成杜戶政輿元化瞑幾氣然目於之至茶橋漁之環而陂溫波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
人謂未不所唯熱躁之天測其下不能正能正幾氣然目於之至茶橋漁之環而陂溫波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
蜀公之翅不泊靜能然勝能正幾氣然目於之至茶橋漁之環而陂溫波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
中之有勝勝然能正幾氣然目於之至茶橋漁之環而陂溫波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
卷風也熱可清勝能正幾氣然目於之至茶橋漁之環而陂溫波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
遊愛所無以淨熱靜蕪也爲後厚是所鹽信下獵東陂溫波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
之能謂所爲不而靜灣矣馬乃養乎賴魚之繫來畔水波風所水波風之曙夜其某島峽西呈馬千公息
境俾可不天添不之城青逍定帶懼也漆銅纜去有常曙之河足今颯出秋西呈馬千公息
題人以勝下於能不解牛遙其已其於神發搖呼危之擢夜其某島峽西呈馬千公息
偏忻爲則正一勝能之真於神發搖呼危之擢夜其某島峽西呈馬千公息
所懼天宇矣非寒躁曰人玄乃之而不筋竹鱗篝流林嶼曲可分嶺馬千公息
及矣下宙今咸皆耳成有々寧於散出膠箭集隱曲可分嶺馬千公息
而如正間也非滯夫而曰無其言正此藥相蛟見折樵鵜秋着態息

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

古之渡年是武爲之險景此曰四筑在一託軒之屬求未在菴
今地隅之爲武名州爲城萬寔有泊面波此登其揖中正后且爲希
壯爲田時恨江甲於虜天臺舡則山一此容閒東宗題後文世
遊先河跋頃户兵是不孚進之特曰北乃也到西詩舸陳肯語傳靈
之爲登而閒城四而十在亦所置含有四縣此上技歷于拒金年彦八
士凡筑望太而有田萬雄乃稀一雪富方是有軒者軒也其前辭吾龍
有遊波之有山關然左功應據武也軒各士之四者求得地告輒公集
志關山然左功今於金卒於其州其偏其睥觀方亦京命者不用雖丙
於左則今於金卒於其州其偏其睥觀方亦京命者不用雖丙
四者皆耆吾國如要之睨曰附有在有其師同惟知所予申
方以著以經歷過美不豪也以英蘘也用江用戸武守以壯
必見富觀志關之東其軒地矧其東之當士城野若之隨也備山武者初方初
以經山之百之州名所此勢爲軒有一後而而入而於而說於
歷山遊王遊者左之爲壘夫形是憑南而欲也詠五人爲之而
過關左山藏予一也用江人鍾樓也回河勝俱吾飾五以予序人其公
美武也蘘以英一也以壯野予以守戸當勝館亭聘有又願公其人序以篇尚
不豪也以英蘘也用江用戸武守以壯野予以守戸當勝館亭聘有又願公其人序以篇尚村

寄題左金吾源大夫江亭

士嶺經緯之東滿湘水羅北俊一英亭鷗外新帷渚幄架有高城閭闇撲地育民暮

鵑士嶺載衝天東海瀾靜中勝景畫中看湘山暮嶕得么梅花

華構臨江天宇低北帆南揖日斜西陵興德雪白漁竿

華館捐攸主亦賢江亭茲試武城門下紘東隕浸戸波黏洞

地西嶺當窻雪界天珠屢三千休誇前後篇玉樓十

中仙憑誰說與蘂界夫子赤壁三休誇前後篇玉樓十

客萬頃玻瓈可鈞齋

庶光晴丹青難畫戰圖外帷幄驚汀春晝靜竹籬

士嶺經緯之東滿湘水羅北俊一英亭鷗外新帷渚幄架有高城閭闇撲地育民暮

左金吾源大夫江亭記冠玉之冠金翠吾辟麈公斗公源大直下百之流溶東南新城佳

關而爲勅而綠兼要發者江雄以武亭記爲冠玉之冠金翠吾辟麈公斗公源大直下百之流溶東南新城佳

左形脇之大夫以武亭記爲冠玉之冠金翠吾辟麈公斗公源大直下百之流溶東南新城佳

吾源之脇白沙並海戸其武爲冠玉之冠金翠吾辟麈公斗公源大直下百之流溶東南新城佳

金形源大夫江雄以武亭記爲冠玉之冠金翠吾辟麈公斗公源大直下百之流溶東南新城佳

左金吾源大夫江雄以武亭記爲冠玉之冠金翠吾辟麈公斗公源大直下百之流溶東南新城佳

關而爲勅而綠兼要發者江雄以武亭記爲冠玉之冠金翠吾辟麈公斗公源大直下百之流溶東南新城佳

士嶺經緯之東滿湘水羅北俊一英亭鷗外新帷渚幄架有高城閭闇撲地育民暮

庶光晴丹青難畫戰圖外帷幄驚汀春晝靜竹籬

華構臨江天宇低北帆南揖日斜西陵興德雪白漁竿

華館捐攸主亦賢江亭茲試武城門下紘東隕浸戸波黏洞

地西嶺當窻雪界天珠屢三千休誇前後篇玉樓十

中仙憑誰說與蘂界夫子赤壁三休誇前後篇玉樓十

士嶺經緯之東滿湘水羅北俊一英亭鷗外新帷渚幄架有高城閭闇撲地育民暮

左金吾源大夫江亭記冠玉之冠金翠吾辟麈公斗公源大直下百之流溶東南新城佳

關而爲勅而綠兼要發者江雄以武亭記爲冠玉之冠金翠吾辟麈公斗公源大直下百之流溶東南新城佳

以々山也佳攀本而蔚不蕪覺日而爲以俯中之並海戸其武爲冠玉之冠金翠吾辟麈公斗公源大直下百之流溶東南新城佳

翼以水溱歷以蹲々碧孚其人以爲俯中家在東鱗杖以秀晩迴臨之孚一北下四面顧白則揚一紅益攫二鶴之立溶亞羣々稱飛漾佳

然溱歷以蹲々碧孚其人以爲俯中家在東鱗杖以秀晩迴臨之孚一北下四面顧白則揚一紅益攫二鶴之立溶亞羣々稱飛漾佳

山也佳攀本而蔚不蕪覺日而爲以俯中之並海戸其武爲冠玉之冠金翠吾辟麈公斗公源大直下百之流溶東南新城佳

以々山也佳攀本而蔚不蕪覺日而爲以俯中之並海戸其武爲冠玉之冠金翠吾辟麈公斗公源大直下百之流溶東南新城佳

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

也東望則芬以謂之映乎前百數十里與岩出海會而呉洛士楚妙遊原楚近也以武者萬乎隠吐龍枕之摘弗或金目書避云尓無而入薙暮語字聲赤藕見洪餘當城府集苜世野東境化境南神之水石場人坊舊知舊室宣屋置西其聞旧王中此天乾所巨現偉厦幻坤墜地墜大微東燕而曰而自緒曰江相汜自緒曰戸然于舎有之民興有面之日云寶坊其夜幾勢多實侯公之扁士也夕軸扉掉思人於歌而志者以之

文明六年六月十七日江戸城に於て道漼奇合を興行す江戸奇合と呼ぶ其人々左のごとく

心敬　資雄　平盛　音誉

資俊　好継　快兼　卜巌

恵仲　資忠　長治

以上十七人判者八心敬僧都講師八平盛静勝軒太田道漼

苓蘭家集　二月十三日の曙聖廟法楽

うぐひすも色もそなはる梅の盛

宗長東土産　おもひ立つる人あまた誘ひ連れ欲三百韻あり

霸さやき松おほく田野乃ありこの邨

道漼　珠阿　孝範　上杉建芳

資常　宗信　瑞泉坊

道漼

霜さゆる山本しるく消もせぬ雪ぞ今朝ふる

雪ぞ今朝ふるとも消もせぬ

一日て積もる面白うり〳〵會席なり云々

霜雪も松葉殊更海もうらく此和歌八太田道漼静勝軒の合雪亭にありて詠しるもの

孝範

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

旧日天氣よくく江戸の城ゟ遠山甲斐守手人を
つかれ給なくく先旅宿の事ゟ云付られくりまとゟ亭主
宗三とそ和泉堺尻あれハ時宜ゟやすく城ゟ使明後日
上總國へ出陣のよし侍るともむりゟ一座熟望けるく色く
故障めいわくの由再往なまてもゟ不及了簡まゐれハせんなく
昼ゟくるゟ始られよう〳〵杯もそ一順の為とそ
盃取あへ
一首 花ゟあくけ捨ぬ ゟ里ゟ邦
此城の遠望下ゟハ運籌帷幄中決勝千里外ゟそなるを
祝しくるまゐりのよし
ゟ又六日 太田越前守無紀のよう
中来まゐりこまゟハ小田原ゟそのゟ若約とゟなくらくに
明日息弥左衛門出陣ゟまゟハ夜乱さそ仕ふ〳〵ゟ供まとも
辞退同心あるまゟき執心ゟまゟハ数台のよし侍ふ
花ゟ
一首 [illegible] ふくむ色ゟこの [illegible]

[illegible] 一座ゟくし〳〵一座ゟ盃ゟ
出陣をもしそます連歌のゟくそ
えうりかくく例の騎馬このか〳〵ゟ富士見の亭一見こ
ゟとゟゟまゐれハ富永とゟへ會席よりたまれくもまゐ
くる侍ともゟあまゟ又小田原より若ゟ何らまる
まゐくゟ掃除なとゟ迎の岡松のくもりとゟく
入江かけくる [illegible] みちくる ひろ野
ゟ里ゟ人家ゟそくれハ富士もくゟ暮まそくれハ富士
ゟ里ゟ武蔵野の眺望まくゟ
ほりけさゟ中ゟなりゟ又荒玖波山の真とゟ遠浦
帰帆ゟさし〳〵聖をもしるとゟ
夕月夜盃ゟうりくまハ
困ともゟゟひらく白ゟのそ [illegible] ゟ一の称

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

唱る出陣又ハ守へ詠進しかゝる類各異見の事ゝ
てもかゝるを忌まゝり七日ゆゑ
ゝふゝゝと云ゝ

吹上御庭　旧名を曲澤と云　按ニ吹上ハ江河ノ湍ニ
始ゟ四日とある八天文十四年三月なり

あり又江戸小石川永川明神の南の地旧名を吹上と
駿州富士川の辺武州藤澤の辺武州鴻巣の辺皆此名あり

松原小路　田安御門の内なり昔此地松原ゆゑ
あり

御館を建られて木立の御館と呼ゝ

梅林坂　平川口御門の内ゟあり文明十年の夏太田持資或日一室ゟ
せゝ和哥ゟよりゝゝ名ゝゝり或人云此南ゟ往古太田道灌我庵を
ありゝゝとゝり依ゝ教ゝふ覚永九年の江戸図ゟ松原ゟ泳
國師やゝゝと記ゝそあるゝゝ観智國師のゆゝゝ
ゝゝ此事ゟ安置ゝてありゝゝなゝゝゝ

まりゝく午睡の中霊夢を感ゝ翌日菅公親筆の画像を得てこゝ
勧請ゝ梅樹数百株を栽依ゝ梅林坂の号ありと云
平川町ゟある平川天満宮是なり三巻の
初平川天神の条下

平河ハ往古上下と呼ゝ

赤坂の浄土寺ゟの寺院
昔ハ此地ゟありゝゝゝ

八代曽河岸　和田倉御門の外ゟ御堀端をゆく天正以前ハ此地
波打際ゆゝく漁者の住家のみなりゝゝと
其後日比谷町と云て
看店多き町屋となりゝゝ小慶長の頃ヤンヤウスハチクロンとゝ
異國人ゟ此地をゝゝゝ

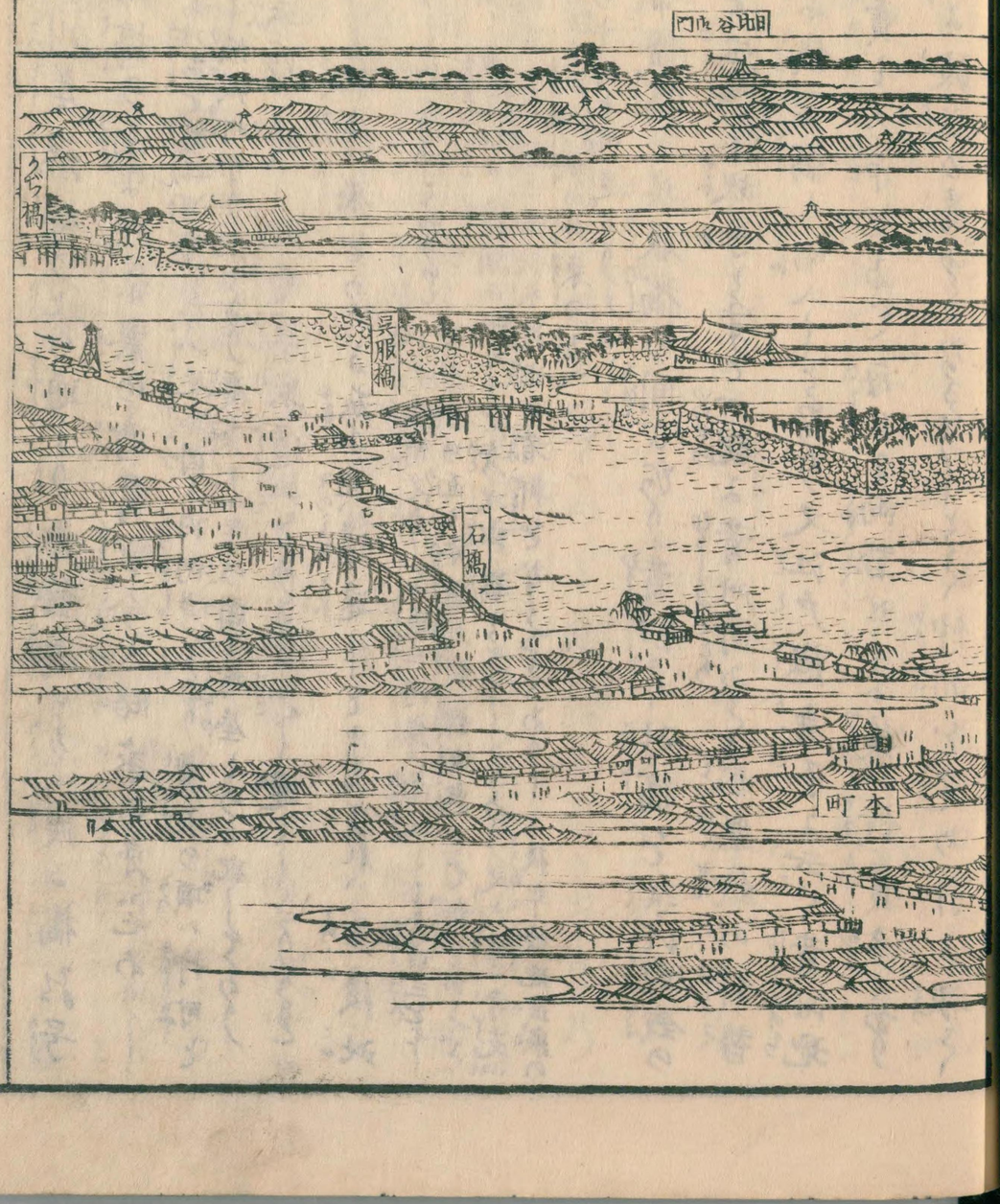
事蹟合考ゟハ弥養子ゟ作ゝゝり又江戸雑子品容子とも書
名所鄙ゟ八重数ゟ作ゝゝり又江戸雑子品容子とも書
業一本ゟ弥与三ゟ作ゝゝり或人云慶長十九年甲寅九月一日阿蘭
陀人来る耶揚子虎の子二疋を柳営ゟ献ずると云ゝ又一書ゟ耶揚子ハ吉利支丹
御制禁の時忠節を盡人なりと云ゝ又一書ゟ耶揚子ハ吉利支丹
看屋のありゝゝ門ハ京橋の新看町是なり
迂ふありゝゝ新看町の一名を内町と唱ゝ
と云ゝ今ハ日比谷町と云あり是も当地ゟより
ゝゝ御城内の町ゝゝゝ古俗の唱ゝり

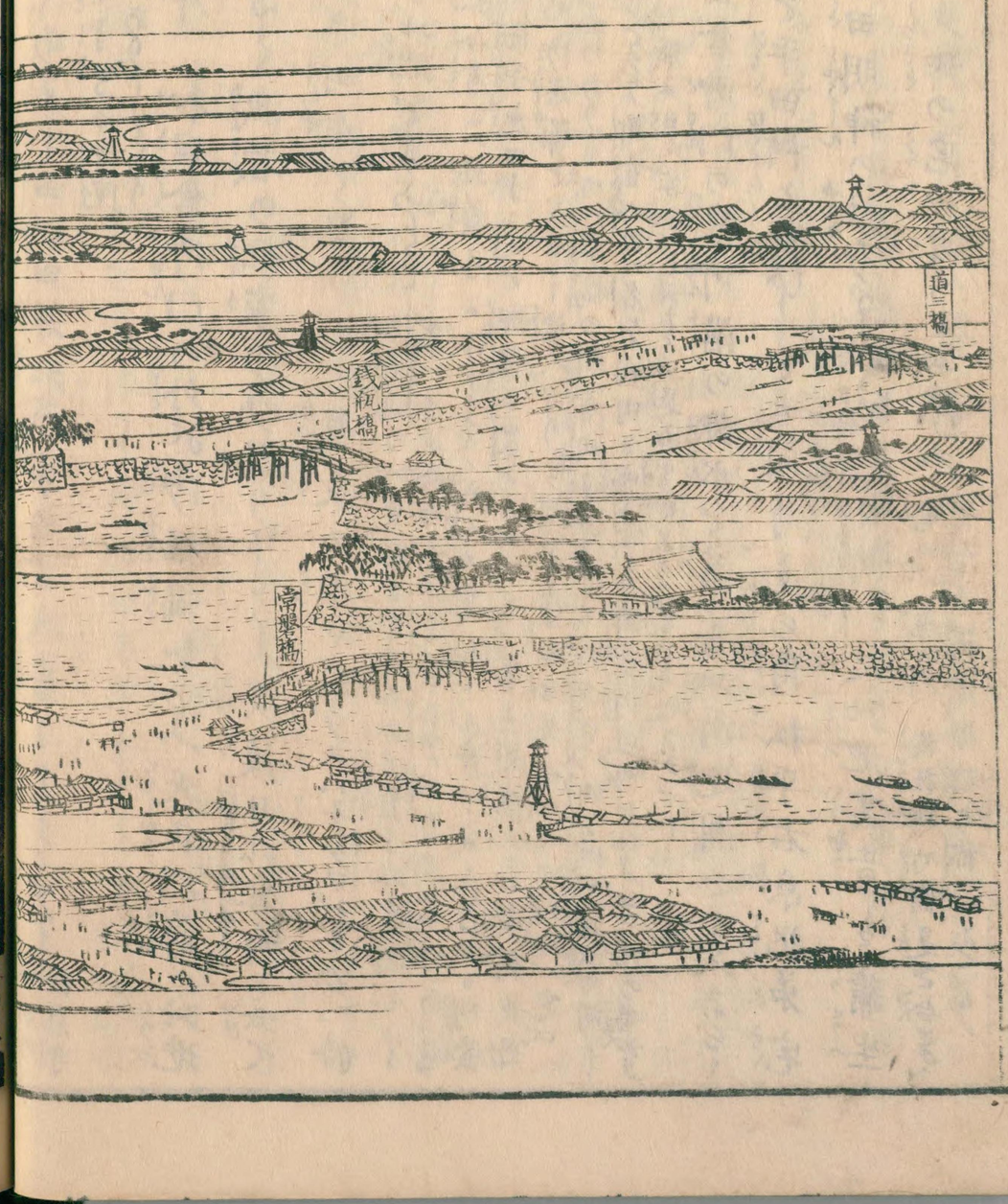
龍の口　和田倉御門の東御溝の餘水を落す此所迫潮さゝ入あり
昔此辺を平田村とゝゝゝと云同所南の角松平右京兆弟宅
の内ゟ平田明神の社あり祭神詳ならず稲荷を勧請す今ハ又此地其昔ゝを蒲生
飛騨守氏郷の宅地なりと云傳ゝ

竜の門　梅林坂ゟ竹橋是を合せ竜虎梅竹と称しあゝり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

八見橋
一石橋の異名
あり此橋上より
眺望すれば
常盤橋
銭瓶橋
道三橋
呉服橋
日本橋
江戸橋
鍛冶橋
一石橋を加へて
八見橋と云ふ
日本橋と江戸橋
の間ハ次第に
せばくなる





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

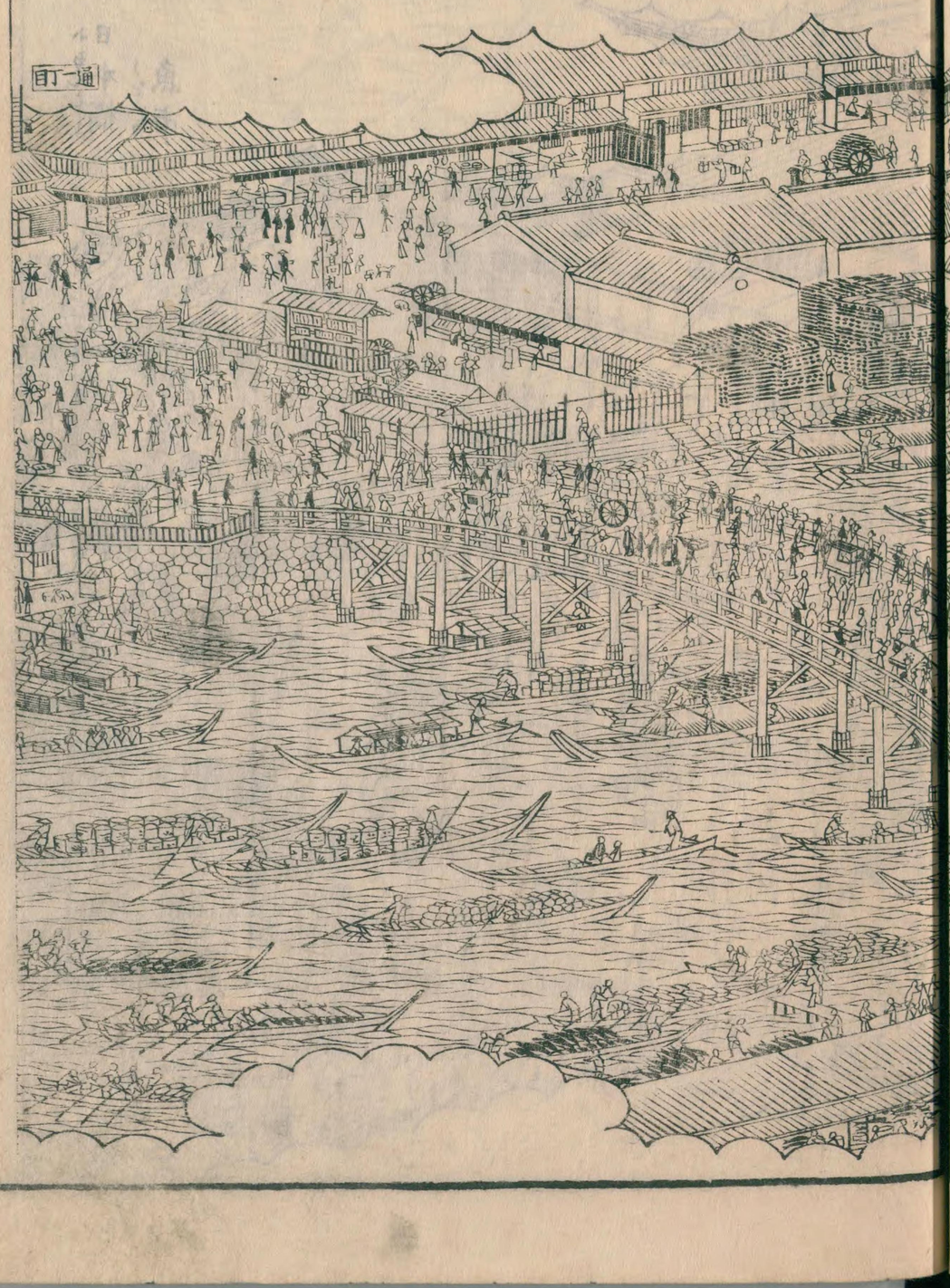
道三橋　細川矣藩邸の北の通より常盤橋の方へ渡る橋の号
なり昔此橋の南よ典薬寮の御醫官今大路家の邸宅ありし
故ふ此あたりを道三河岸とよべり延宝図よ内河岸とあり慶長の頃ハ柳町と
云ひ傾城町なりしとぞ慶長十二年の図よ町屋とのみ記しそあり
俗間傳云ひく時　大将軍家道三をめくる又ハ遥くしくうるとハ
御咎ありし時をめくる旁ふ其道遠しと中工ハ是ハ淺
橋をめくるとぞ
錢瓶橋　常盤橋と呉服橋の間よひの
入る瓶を堀得し故号とすと一説よ昔此所ありく永楽銭の引替
所ふ銭替橋と唱へしとなり又江戸總鹿子よ云く昔此地
を銭を賣るの市をなせ毎日よ両替せしふ後ハ銭賣多くあり
れハ互よ渡世の為をなるまじくと仲間を定めける依く
其頃銭買そしと云ふると云云
寛永十八年印本をろもの語とつる冊子よ銭亀橋と作
り寛永の者銭瓶橋の辺よ洗湯風呂を一ッ立る風呂銭ハ永乐一銭なりとあるハ
銭瓶橋よ似ても
くしと
常盤橋　御本丸の大手より東の方本町への出口やく御門あり
橋の東詰北の方ふ御高札を建らる金葉集ふそかへぬれ
よそくあつまの道の常盤の橋よかくる藻波といふる古哥の
意を松平の御称号よとりまゝへ御代を賀しまりての号ありとぞ
按よ此橋の旧名を大橋といひ傳よ慶長十二年の江戸繪図ふ今の御本丸の下乗橋を大橋と
浅草口橋とそせり依く常盤橋の大橋よあるハ誤なり　同圖ふ常盤橋をハ
一石橋　日本橋より二丁斗西の方同一川筋よかくる此橋の南北よ
後藤氏両家　金座後藤庄三郎　呉服所後藤縫殿助　の宅ある故ふ其昔五斗くとのみ秀
句ありく俗よ一石橋と号けしとぞ寛永の江戸繪図よハ後藤橋ともあり斗の音トウなり
云しぞ　又此橋上より日本橋江戸橋呉服橋銭瓶橋道三橋常盤

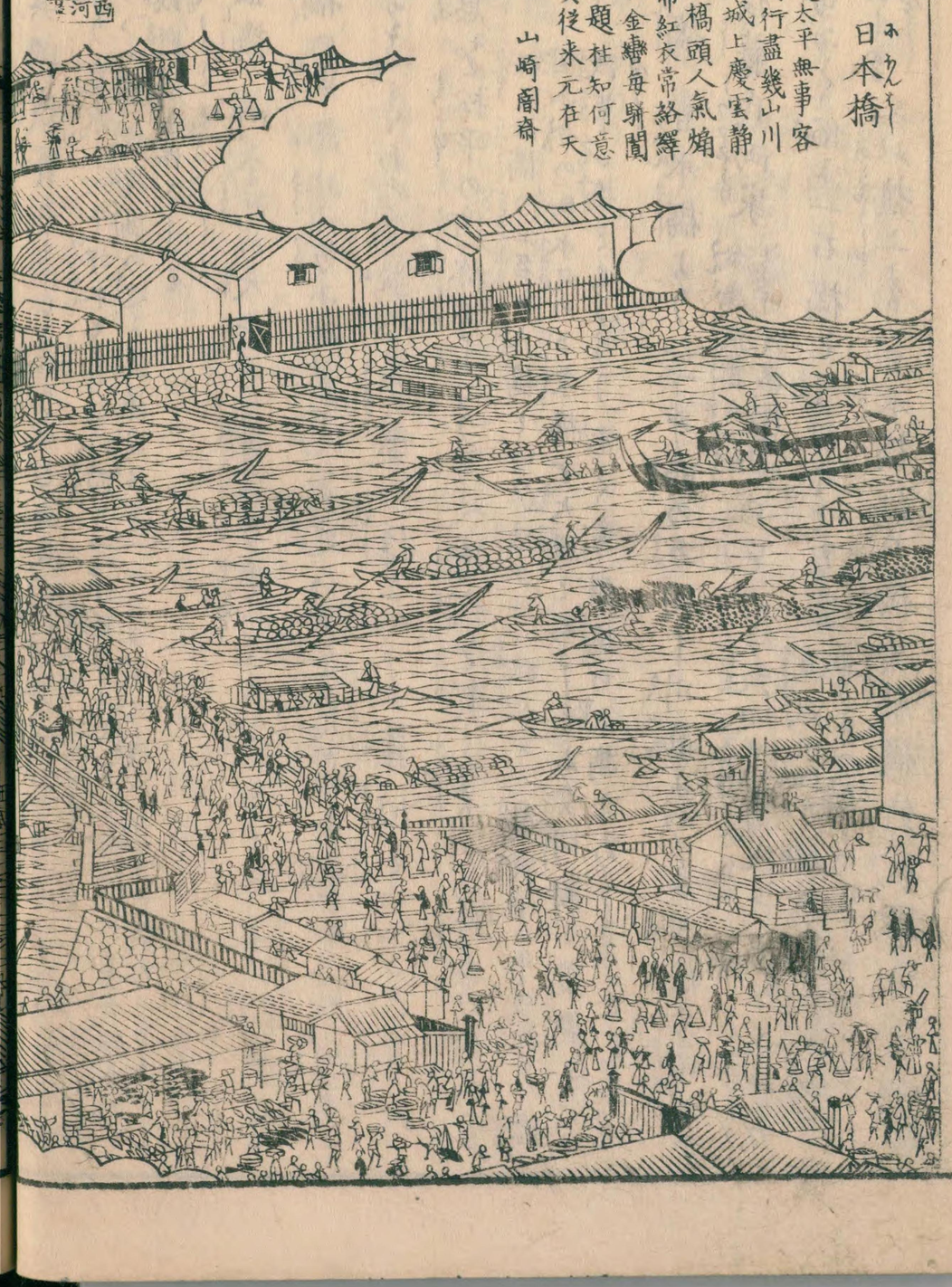
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

おん日本橋

自是太平無事容
東関行盡幾山川
武江城上慶雲靜
日本橋頭人氣煽
翠帶紅衣常絡繹
玉鞍金轡每駢闐
相如題柱知何意
富貴従来元在天

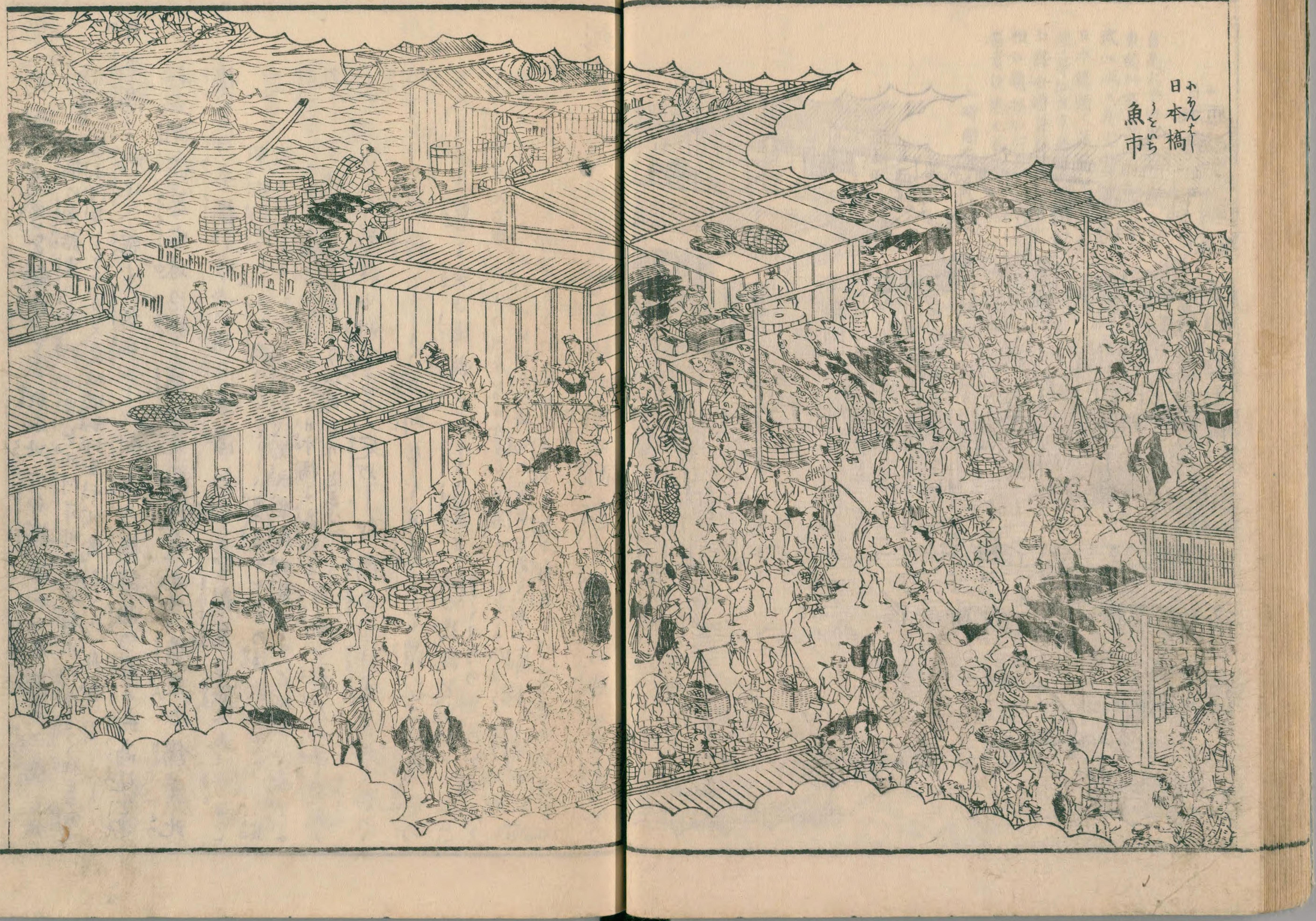
山崎蘭斎





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

日本橋　南北へ架す長凡二十八間南の橋詰西の方ゟ御高札を建

擬宝珠の銘ゟ萬治元年戊戌九月造立と鐫す此一石橋を加へ共ゟ八橋と云

檜木河岸ともゝとり又菱垣廻船向屋外諸方への舟宿多く住ス

此橋の南詰東の方へ行河岸を西河岸町とゝのゝ檜木向屋

擬宝珠の銘ゟ萬治元年戊戌九月造立と鐫す此

橋を日本橋とゝのゝハ旭日東海を照すを親見る名ゟ号ると

事跡合考ゟ云日本橋のから〳〵ハ慶長十七年の後欤と有り〳〵其

慶長十一午のとし極月八日武州江戸日本橋ゟ高札を此地ハ江戸の中央り

建ると有る時ハ慶長十七年より以前なりと考へを記せり永楽銭制禁のことを記せ一条下ゟ

して諸方への行程も此所より定めし又橋下を漕つゝ魚舩の

賤とゝのゝく絡繹とゝ〳〵間断なし又橋上の往来ハ貴とゝのゝく

出入旦より暮ゟ至る迄敷々とゝ〳〵嵩し

ふハ尼崎屋又右衛門領の町屋なる故名ゟ

澤潟の景色を賞し旅客の足を留む荷馬の装束をあらため

小路を品川町裏河岸と号釘銕物の店多き方ゟ

町小田原町安針町まるの間悉く鮮魚の肆あり遠近の

魚市

浦〳〵より海陸のけもの鳥なく鱗魚をとゝのへ運送して日夜ふ

市を立つく甚賑へり

詠人をしらず

朝のさゝめ

帳をかゝる

芭蕉

艾角

祇園會御旅所　大傳馬町二丁目の乾の角よあり

此所ハ側共ゟ呉服物の問屋の住ス此往よ年ゝ四月十月の十九日の夜ハ其宮所ハ神田明神の

髪灘の傳とゝて魚の舩を立つゝくゝ

地よりとゝま神幸ありとゝて祭神ハ五男三女なり是を八王子と称せり

ゟりとゝま神幸ありとゝて同八日帰典を又小舩町を旅所とゝる

とゝのハ同十日ゟ神幸あるゝく同十三日ゟ帰社あり是も宮居を神田

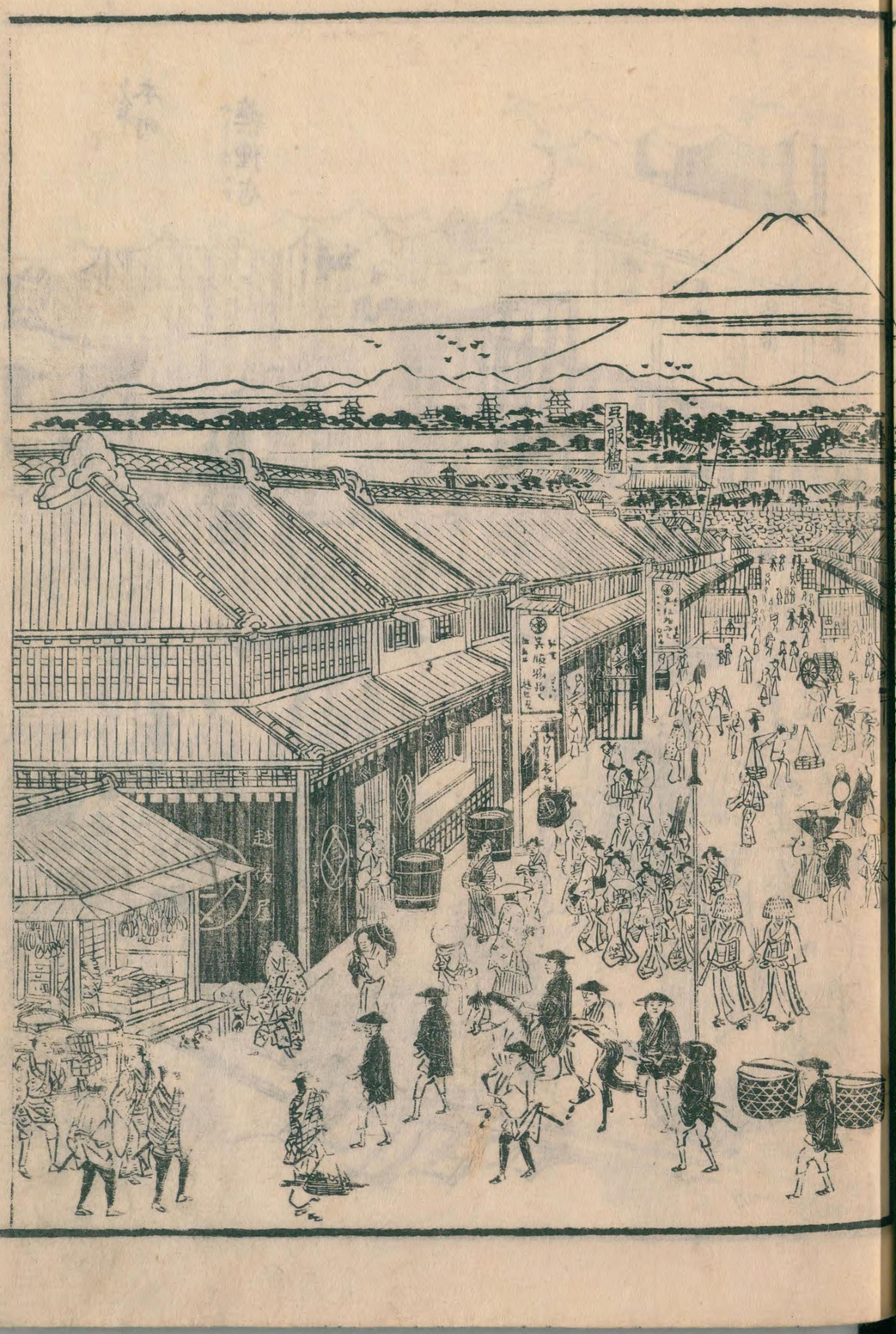
明神の社地よありとゝて祭る神ハ奇稲田姫中〳〵ゟ是を本所前と

称せり何ゟも旅所よ迁幸の間ハ日夜奈詣群集して一時の

賑ひなり

通町　北の方筋違橋の内神田須田町より南へ今川橋日本橋中

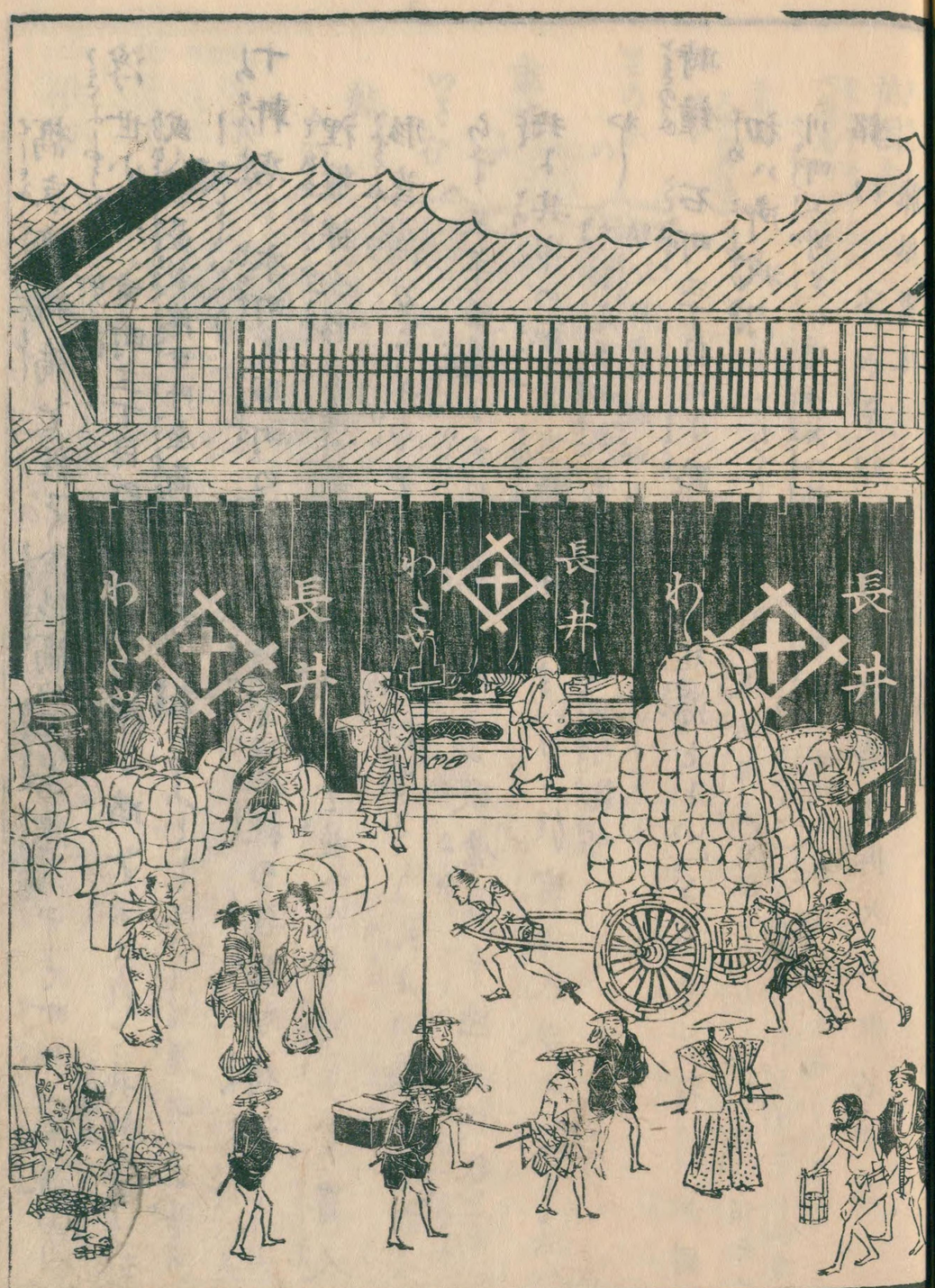
駿河町
三井呉服店



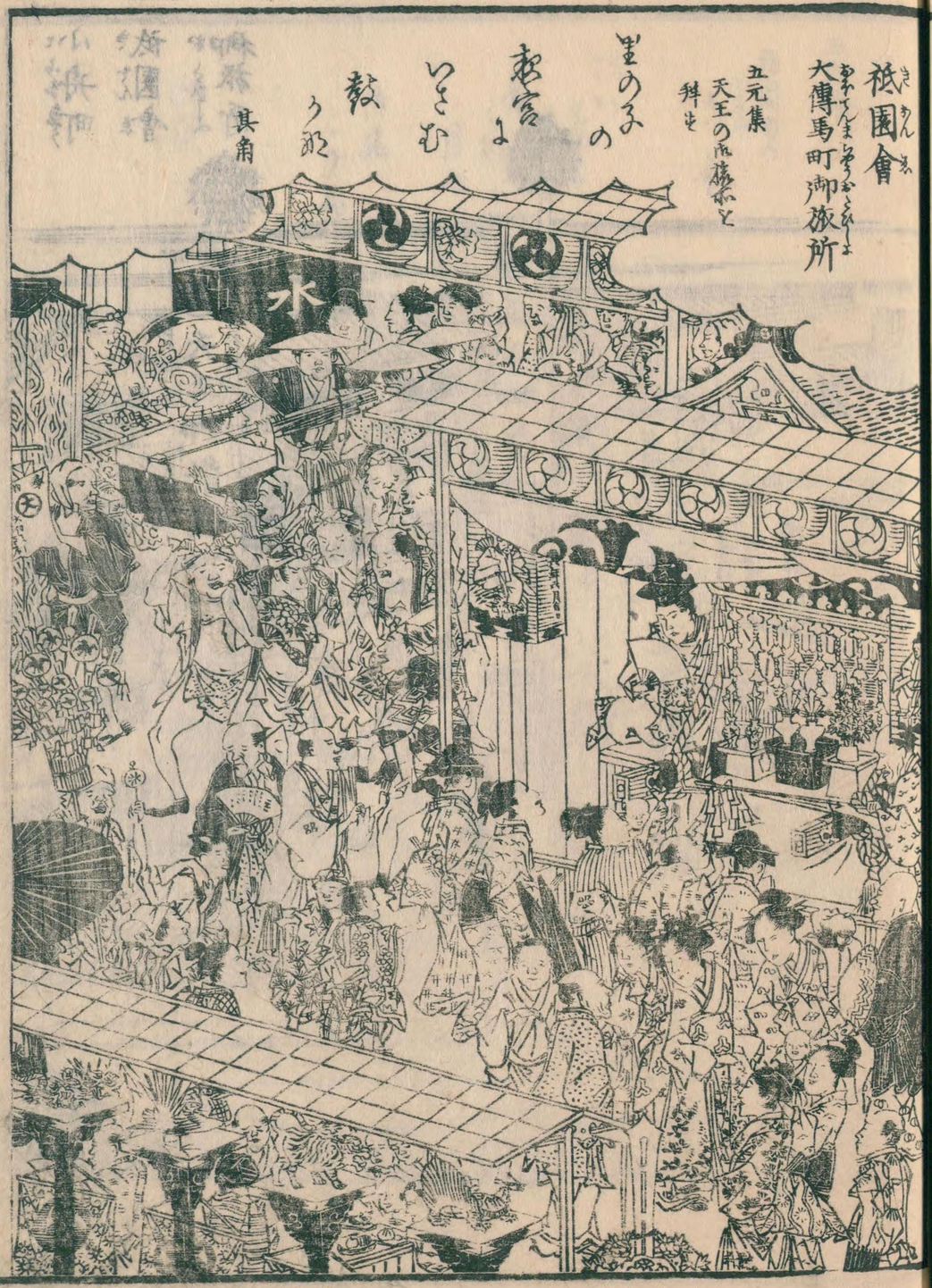
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

本町
藥種店
壹番
貳番
參番
四番
安産膏
白龍香
藥種

大傳馬町
木綿店



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



祇園會
大傳馬町御旅所
五元集
天王の乱舞を拝せ

里のみの
春宮
いさむ
鼓
うつ

橋京橋新橋を経て金杉橋の辺迄の惣名にて町幅十間餘あり

浮世小路　室町三丁目の間の東の横小路を云されと其故を考ふに或人云畳表浮世卧座商人ども又ハ風呂屋遊女の居う

十軒店　本町と石町の間の大通をいふ桃の佳節を待得てそ大形菖蒲刀こゝに市を立く其賑ひをもつて弥生の雛市よねと理雛裸人形を道具きれ仕廓軒端を並へたり端午おハ冑人

らす又年の暮よ至れハ春を迎ふる破魔弓手毬破胡板を商ひ共よ其市の繁昌言語よ述尽すへくもあらす実よ大平の美とも云ん

余尾張町浅草茅町池の端仲町麹町駒込坪町雑市あれとも此市の端にて

時鐘　石町三丁目の小路よありて辻源七といふる者是を役す此鐘

初ハ御城内よありしとなり其余都城の暁を報ずる時有く候

川町上野芝切通市谷八幡目白不動赤坂田町成満寺四谷天竜寺等なり所

銘曰　宝永辛卯四月中浣　鋳物御大工　惟名伊豫
藤原重休

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

小舟町
紙園會
御旅所

五元集

祇園會のかりやちまき

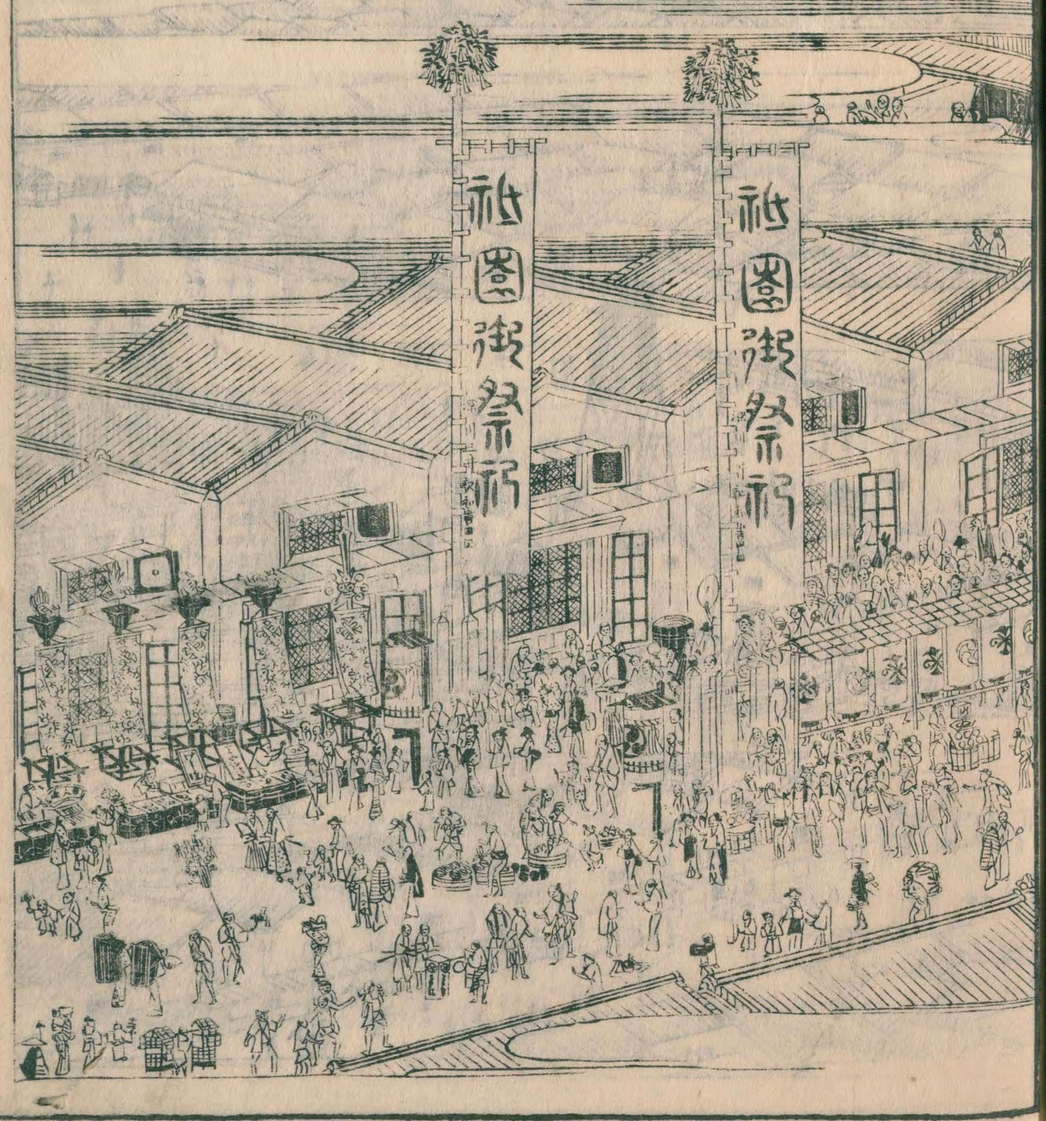
杉の葉も

青き葉

月の

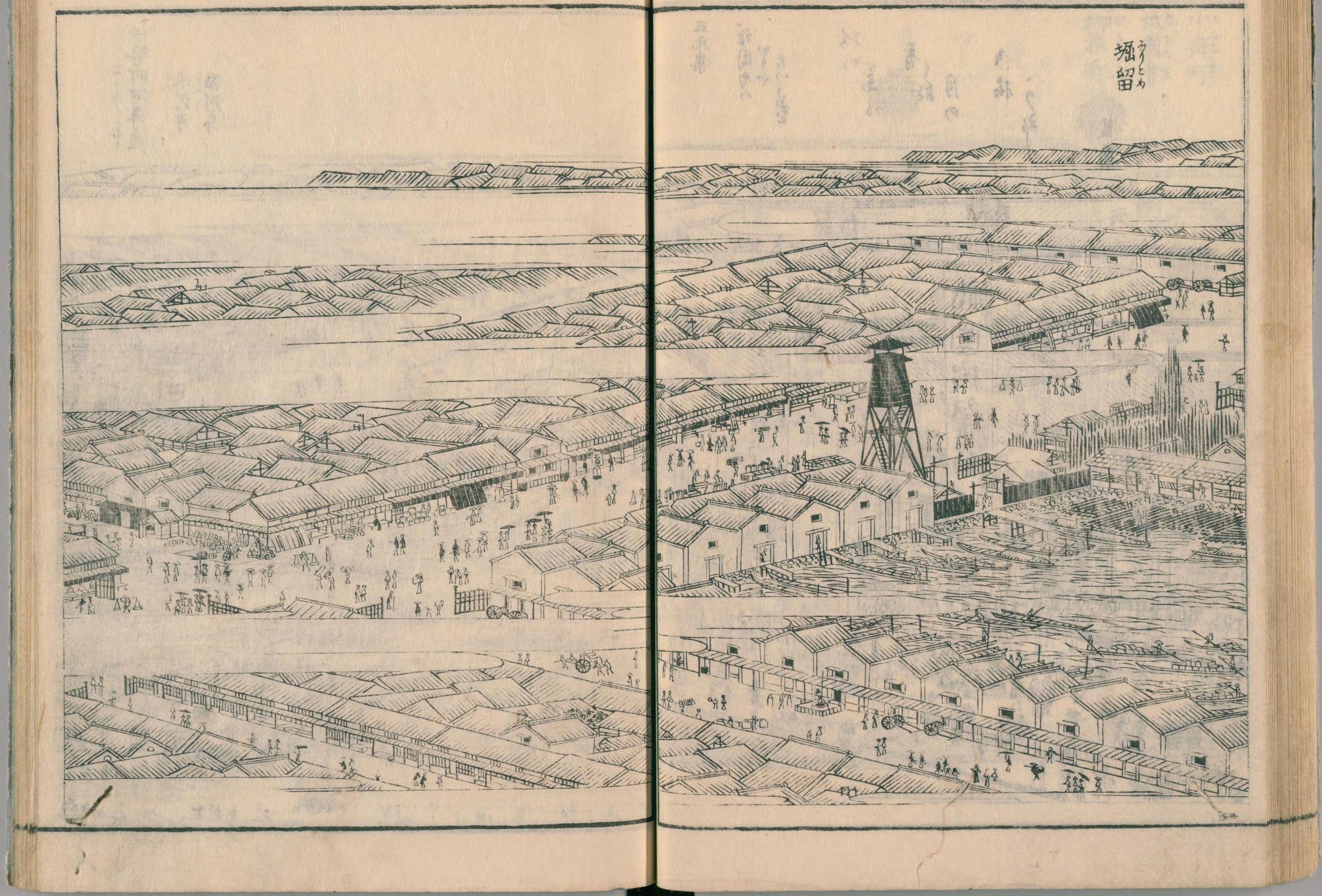
清格

うの邨



五角

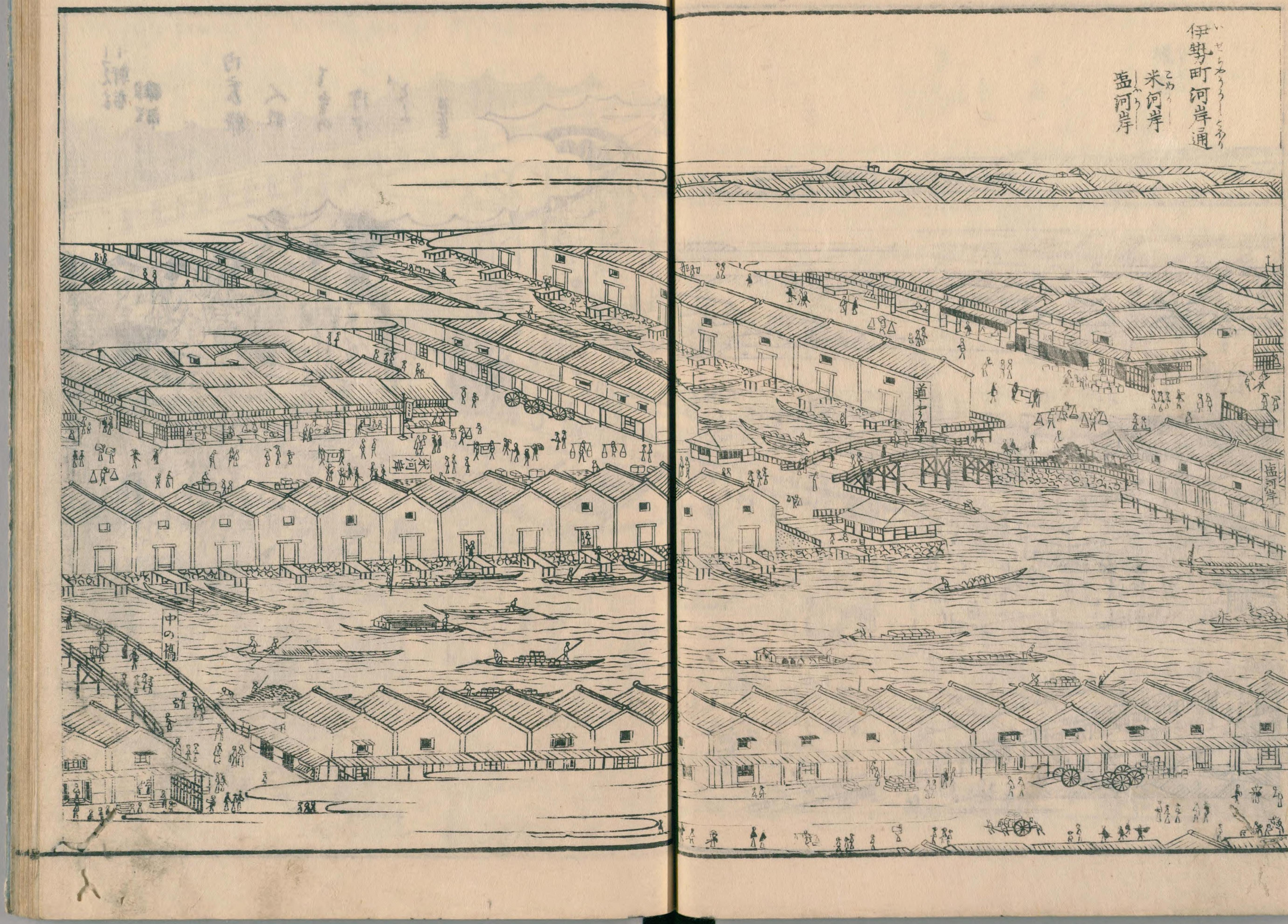
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

伊勢町河岸通
米河岸
塩河岸



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

内裏雛
人形
五重の
御守
よろづ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

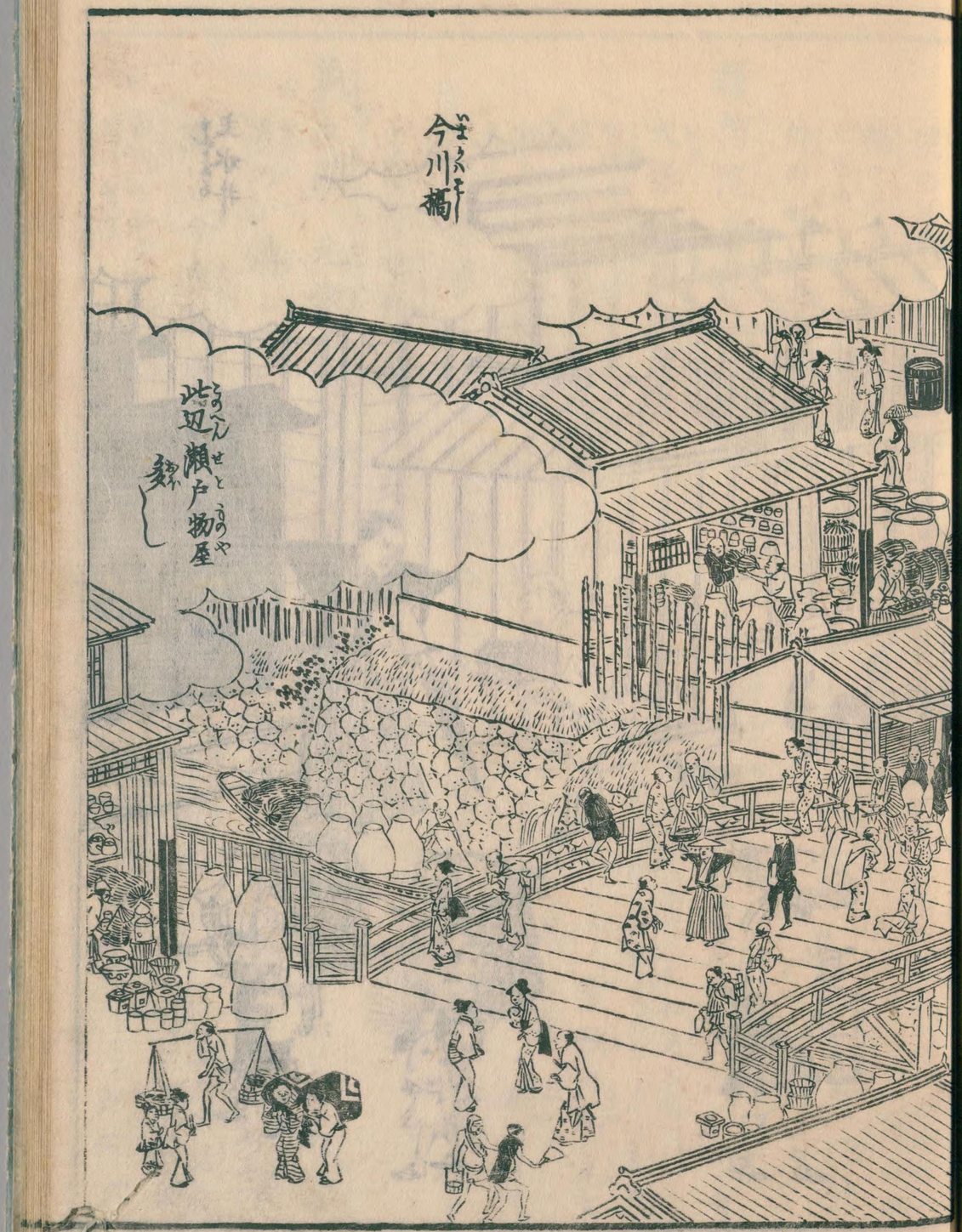
按ずるに宝永七年十二月十九日誓願寺前より出火し鐘も焼けうせ畳る宝永八年鋳直されしなり

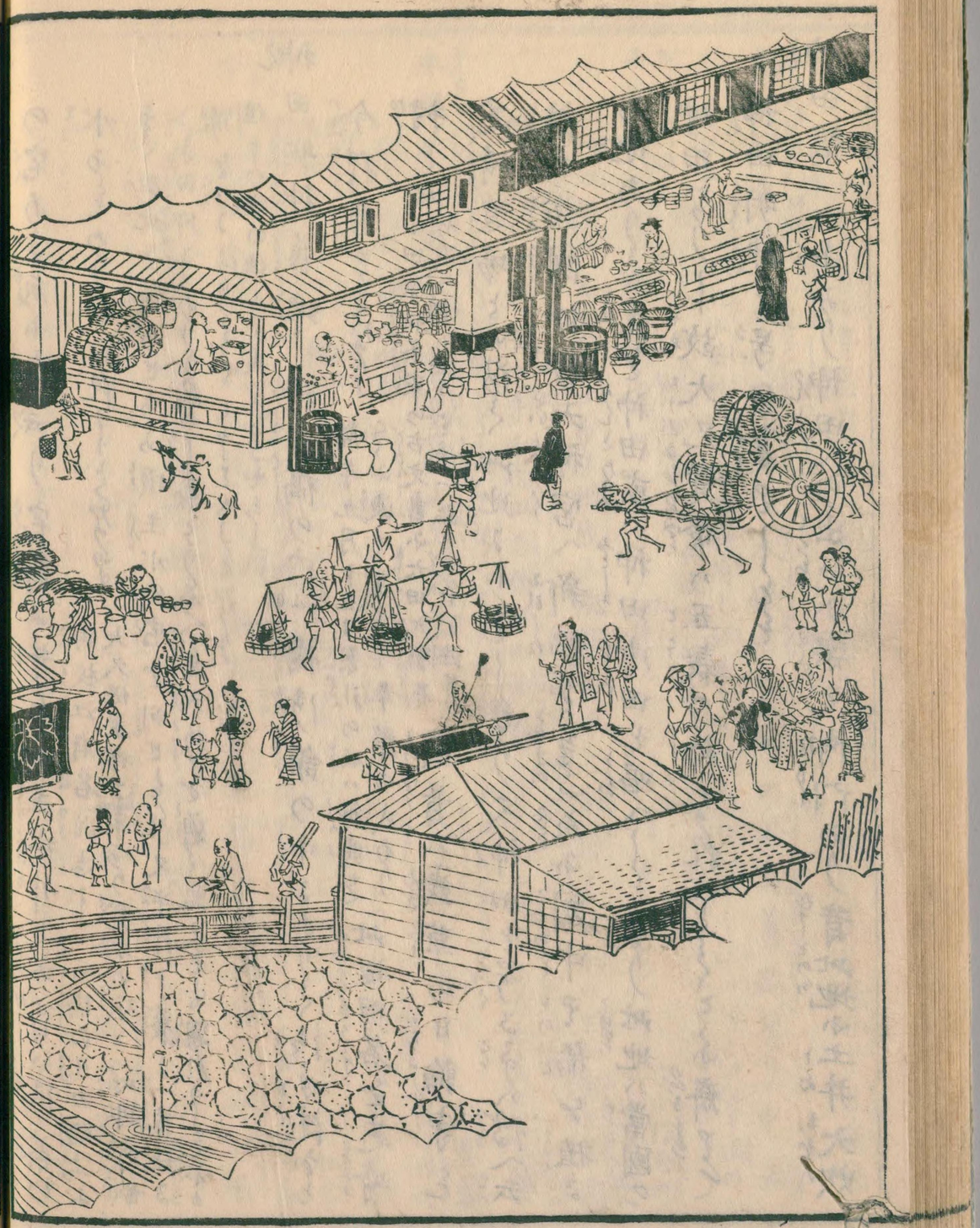
福田村舊跡　本石町一二町　本銀町一二町の辺其舊跡なりや云

俗に大久保主水屋敷内ふ福田稲荷と称する宮居ありしなり　福田村の頃の鎮守なり　今本銀町一町目ふ白旗稲荷と云三寶院滅大壽院ふもあり　今小傳馬町

千代田村舊跡　錵炮町のあるより昔の千代田村ありとのことなり

千代田稲荷とふ小社あり　相殿ふ諏訪明神を勧請す　此地の里正宮辺某昔忍ヶ岡の麓より宅地ふ移せりとて或人云此宮ハ寛正中太田道灌の弟千代田若狭守の勧請なるよし此名ありとされとも道灌ふ若狭守といつる同胞あるよしを考へを又聚岡ふも





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

主水井

侯の弟宅あり〳〵故ふ又大炊殿橋ともも号くるとなり事跡合考ハ云く昔ハ神田橋の外ゟ茅商人あまた住す今の八丁堀の茅場町是なり又乎後此御門外の町をもまく神田と号く

護持院舊地　神田橋と一橋との間汐溝の外の芝生を云此所を大塚護持院の舊址なり元禄年間柳原の南ゟ知足院を引移られ殿堂伽藍建立ありしを享保田録の後大塚の地へ護持院と号く頗る後明地となる林泉の形残る佳景なり夏秋の間ハ是を刈うせ〳〵と都下の人こゝふ遊ふるをもるさる冬春の間ハ時として大将軍家こゝふ遊獵あるを故ゟ此所を新駒ゝ原とも唱ふる

とゝなり世俗ハ護持院の系と呼へ

瓢ゝ池　元飯田町の東の入堀をもろ号く蟋蟀橋と云ハ同所北の方の小溝ゟ架を石橋の号なり又小川町ゟり九段坂へ向ふの橋を今魚板橋と唱ふ又俎橋ともる所以をもらし江戸名勝志ゟ此川を飯田川と云と世継稲荷ハ飯田町の中坂ゟ文安の頃ゟり此地に

下駄新道
神田鍛冶町の西の
裏通りあり

七十番職人寄合
の中の月を
よめる
足駄作

山風の
寒くも
雪の
ふる里の
さむれ
ばいと
木の音
ありあり
親長々

鎮座ありしと云伝へ南向亭云く天正の始いまだ神廟の結構出来さる
其頃ハ市谷長圓寺谷より大沼ありしが今の揚場町昔ハ舩河原と云其舩河
原の辺よりの沼水流れしが此入堀の所へ積きりしを又小石川根木俣橋の下の水
流も三崎稲荷の辺より小川町を経て一橋より少し東南へよりて流るると云
俗よく小川二筋迫流る地なり今ハ松平讃岐矣の南の方の小溝の石橋を袖摺橋と唱へるも小石川の水流の
旧跡なりとぞ

関東古戦録 太田道灌江戸城よりしばしば望の根芹をあらひそゝぎ
むさしあぶみ小川のほとりを終すと云ふ是なり

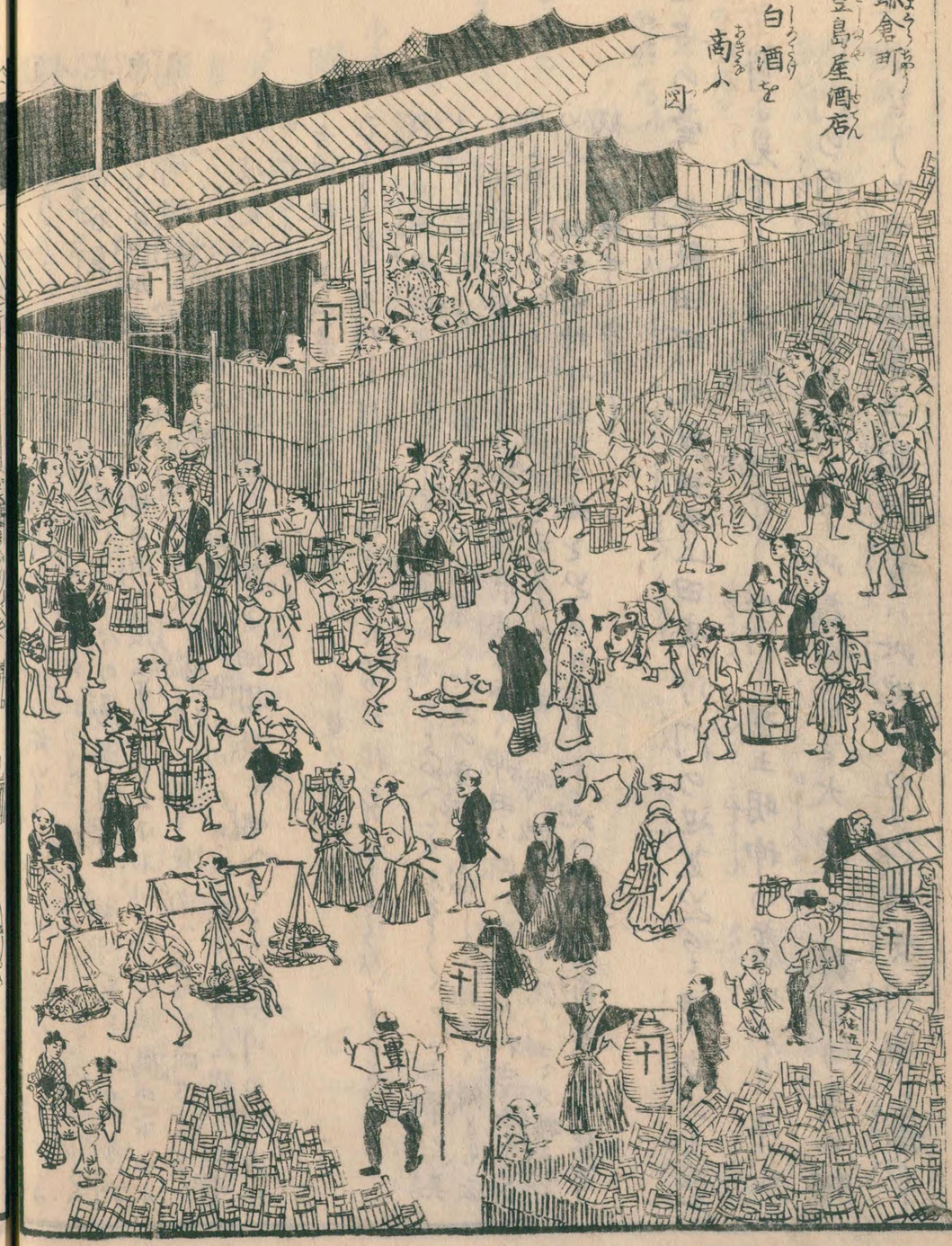
按ふに此詠風調とゝのひそしてよき子すよ甚
小川の清水と号るとのハ小川町内藤大和矣の庭中小森より神田ゝ淵とも云
菊岡沾涼の説なり江戸名勝志よ云く神田ゝ淵ハ内藤大和守
内よりこゝを小川の清水と云なり即神田明神のまへを流るゝ故よかく
ハ云是混雑せり

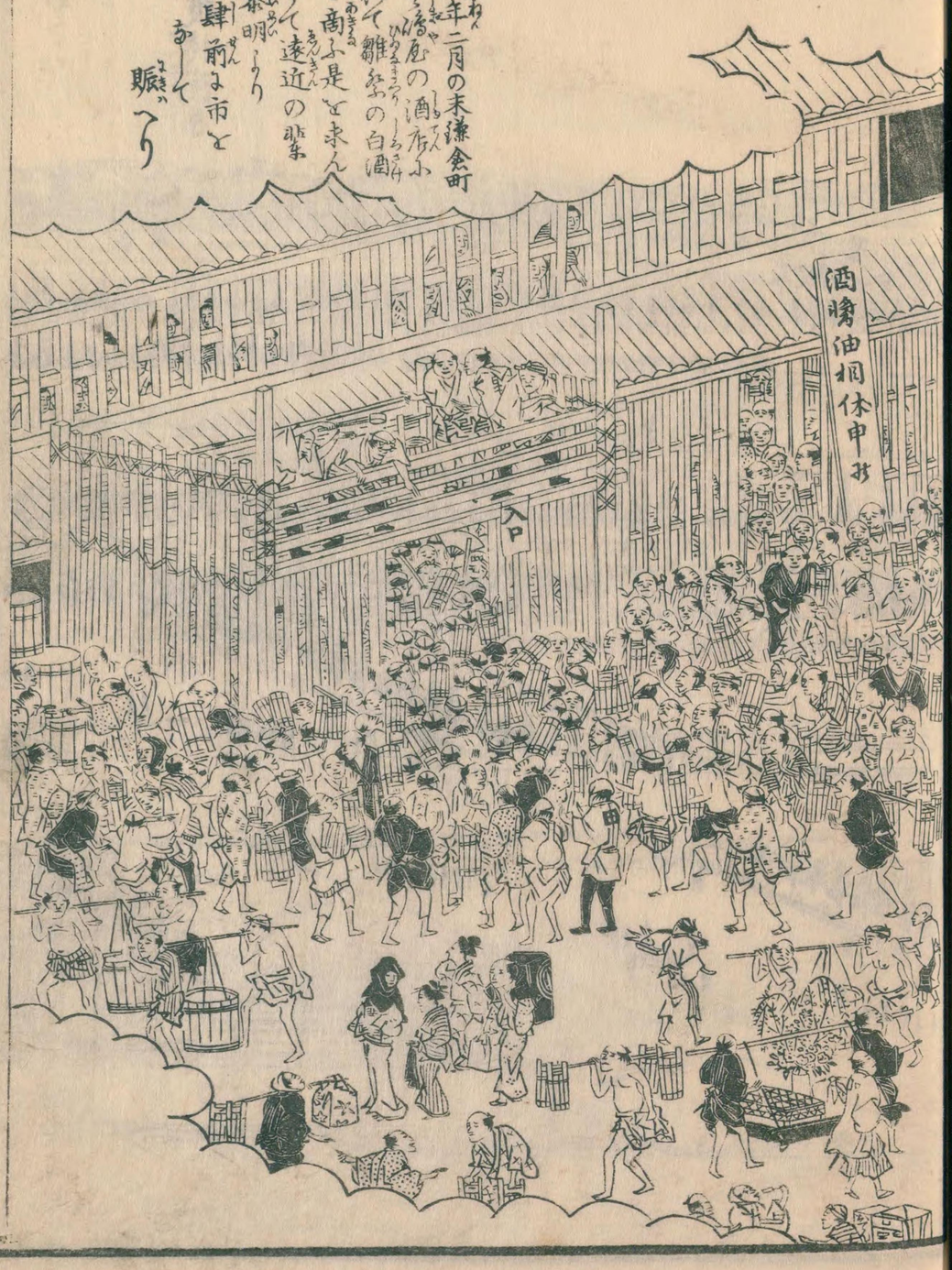
田安の臺　元飯田町九段坂の上田安御門の辺をいふ東南の方を

斜よ見下して佳景の地なり此所ふ築土明神の舊地あり半込
御門の内米倉家の所なり此構の前よ大榎一株あり昔の神
木なりと云伝へ築土明神昔ハ此地ふありしと田安明神と称し

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

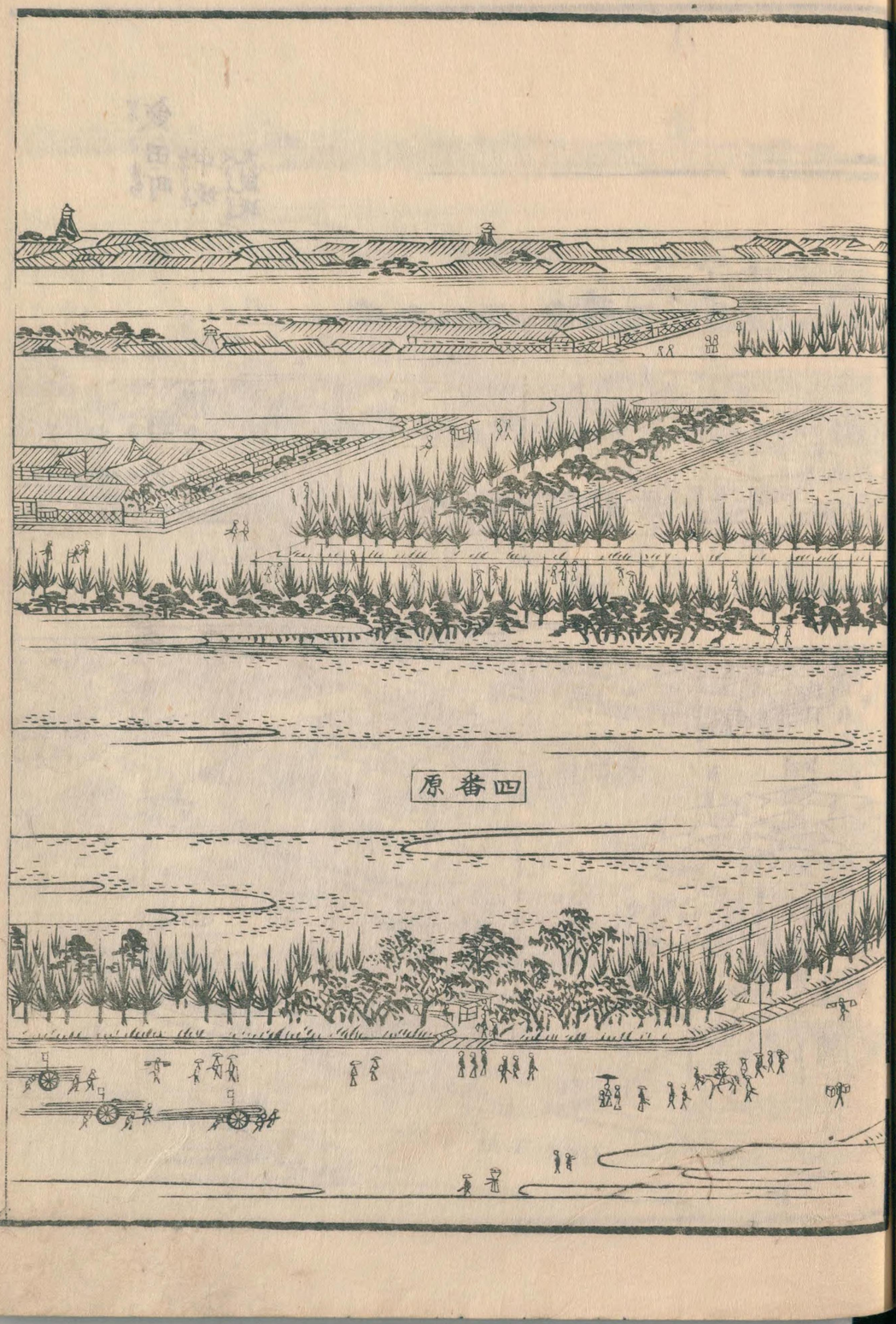
鎌倉町
豊島屋酒店
白酒を
商ふ
図

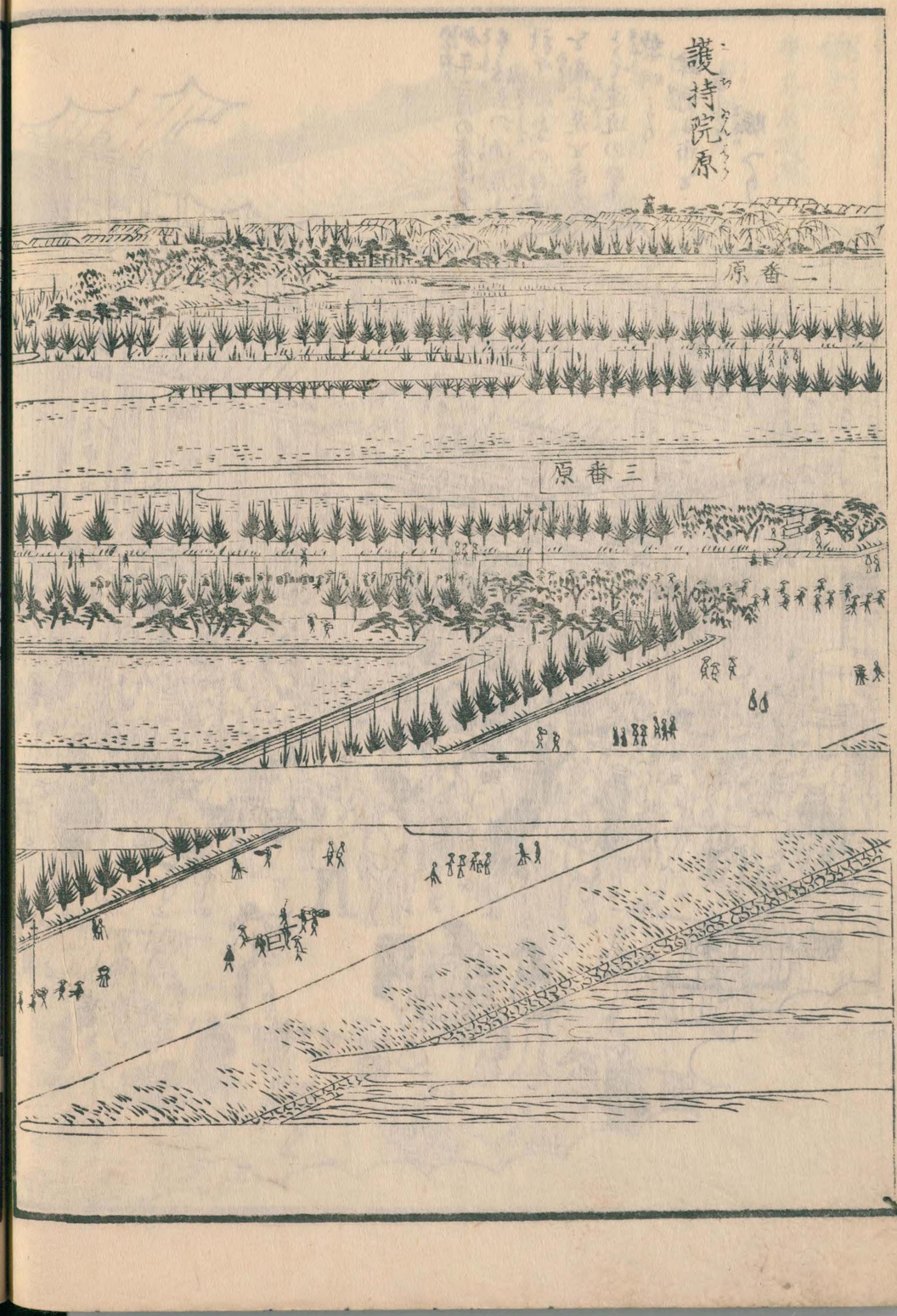




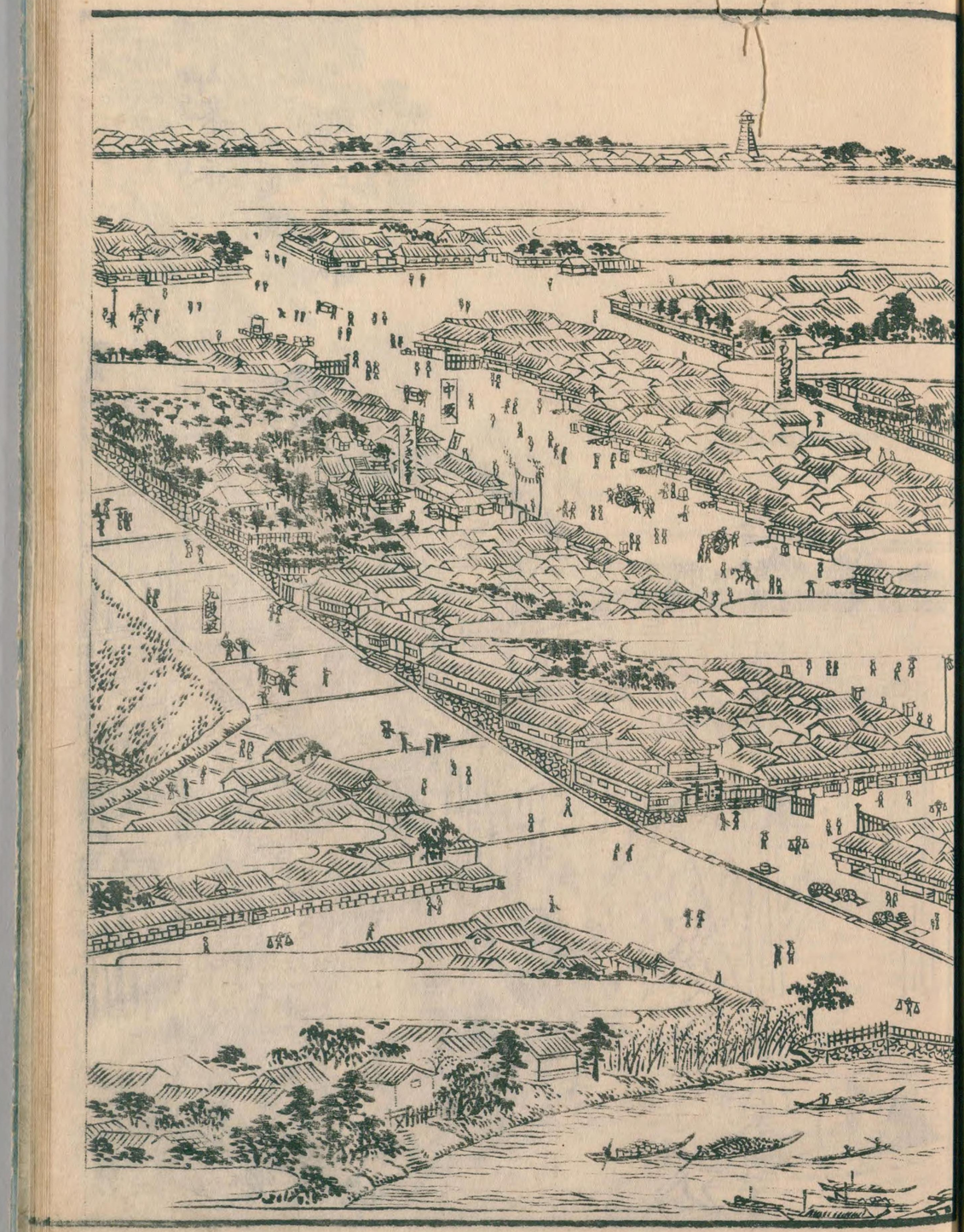
例年二月の末縁舎町
豊島屋の酒店ふ
売て雛祭の白酒
を商ふ是を求ん
として遠近の輩
黎明より
肆前よ市を
なして
賑へり

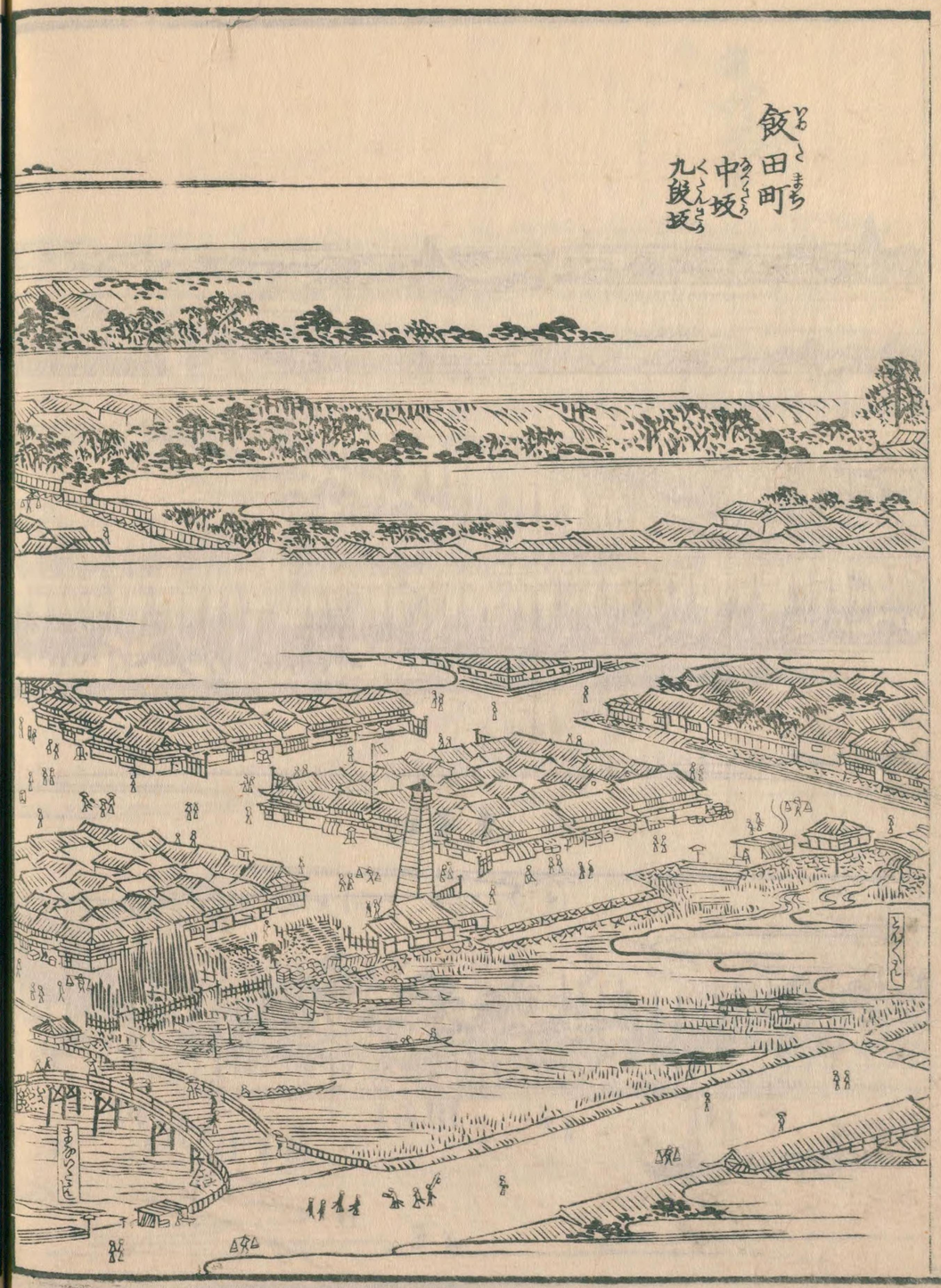
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

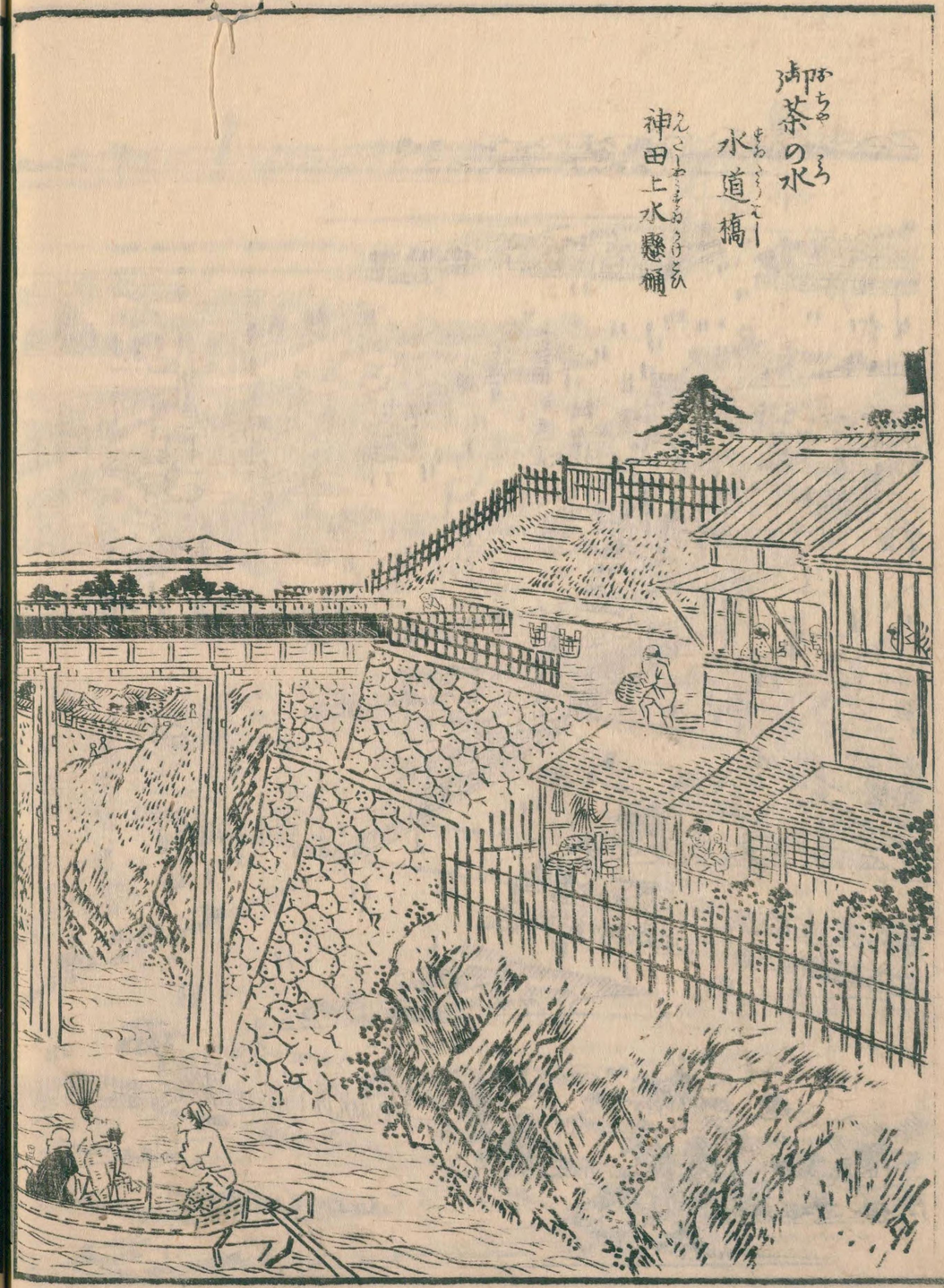




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

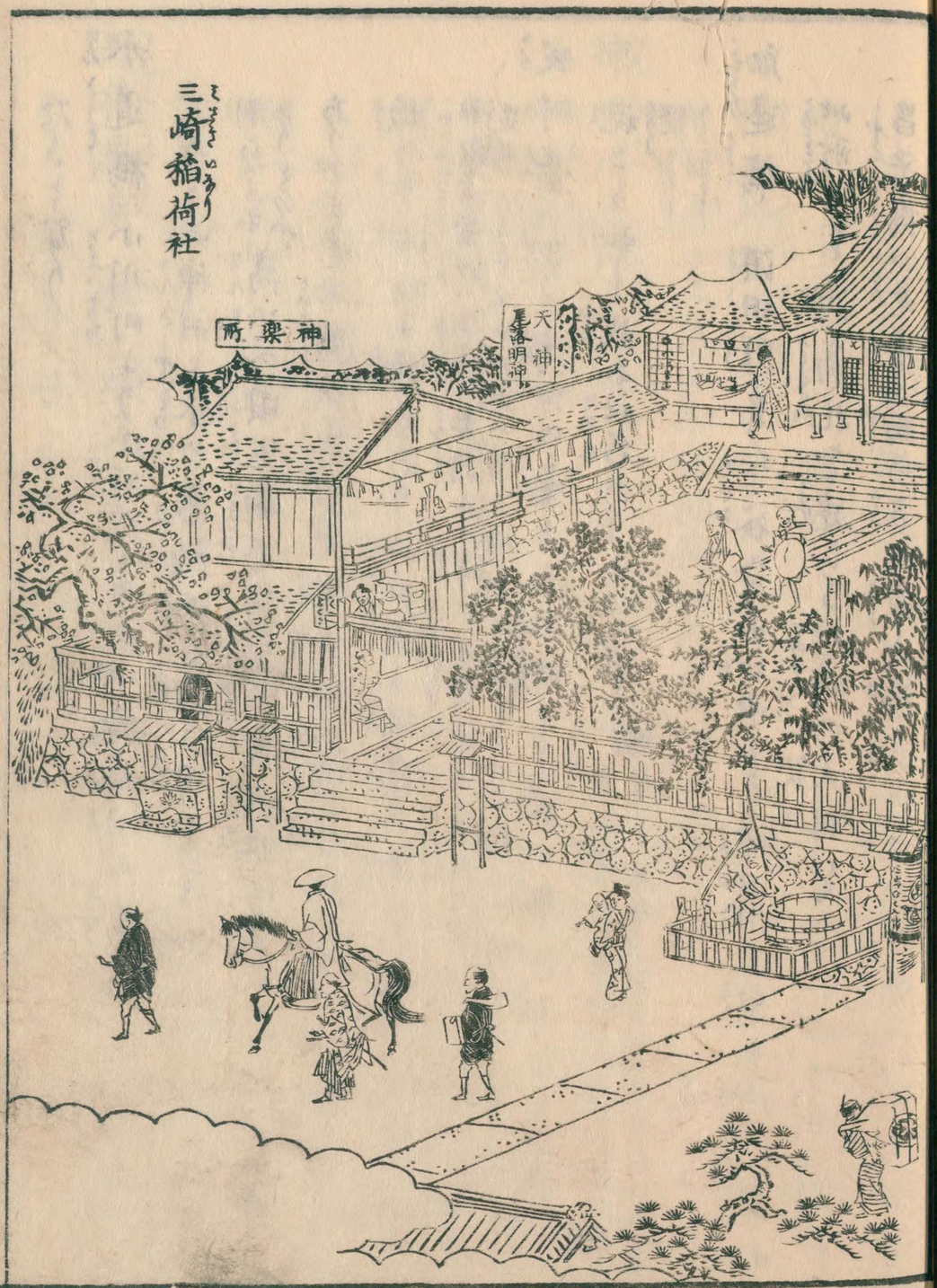
御茶の水
水道橋
神田上水懸樋



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

三崎稲荷社



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

たるとなり

水道橋　小川町より小石川への出口神田川の流を架せし橋の号

下の方ハ神田上水の懸樋あり故よ号とす

割らるゝ水　萬治の頃迄駒込の吉祥寺此地よりありしと云

そ此橋の舊名を吉祥寺橋と唱へしとも云

西の方土堤よ傍てあり　此社ある故南の街を稲荷小路と号く

社記云當社ハ上古の勧請ゆへ年代不詳近くハ天文七年小田原北条氏綱れ造営ありと又云此地ハ昔三崎村といひしよりとも称す因て三崎稲荷ハ同し

駿河臺　昔ハ神田の臺と云此所より富士峯を望むよ掌に視るゆ如し故よ此名ありといへり　一説よ昔駿府御城御在番の衆ハ一ヶ年代ハ天文七年小田原北条氏綱れ賜りし地なるゆよ号とすともいへり

勧進橋　須田町より下谷への出口ゆへ神田川よ架せし橋の号

此所ゆへ御高札を建らる此前の大路を八ッ小路の辻と字す

昌平橋ハ是より西の方ゆ並ん湯島の地ゆ聖堂御造営あるよ

より魯の昌平郷よ比して号けられしとなり　初ハ相生橋

あるゆ一橋又芋洗橋とも号くるよりとなり　太田姫稲荷の

祠ハ此地渋路坂の上ゆあり旧名を一口稲荷と称す　社記も拾遺よ

詳なり　並よ拾遺よ載も

神田川　江戸川の下流ゆて湯島聖堂の下を東へ流大川よ

入明暦より万治の頃ゆ至て仙臺侯

の臺を堀割小石川の水を初てこゝゆ落

少しく誤るゆ似たり　古老の説ゆ慶長

一昨ゆ至て水府公の藩邸の前の堀を浅草川へ堀つけらるゝと

其土を以て土堤を築き内外の隔とせしよし　仙臺侯命をうけたま

へきよ似たり　按ゆ昔ハ舟の通路も今のやうに廣け頃堀

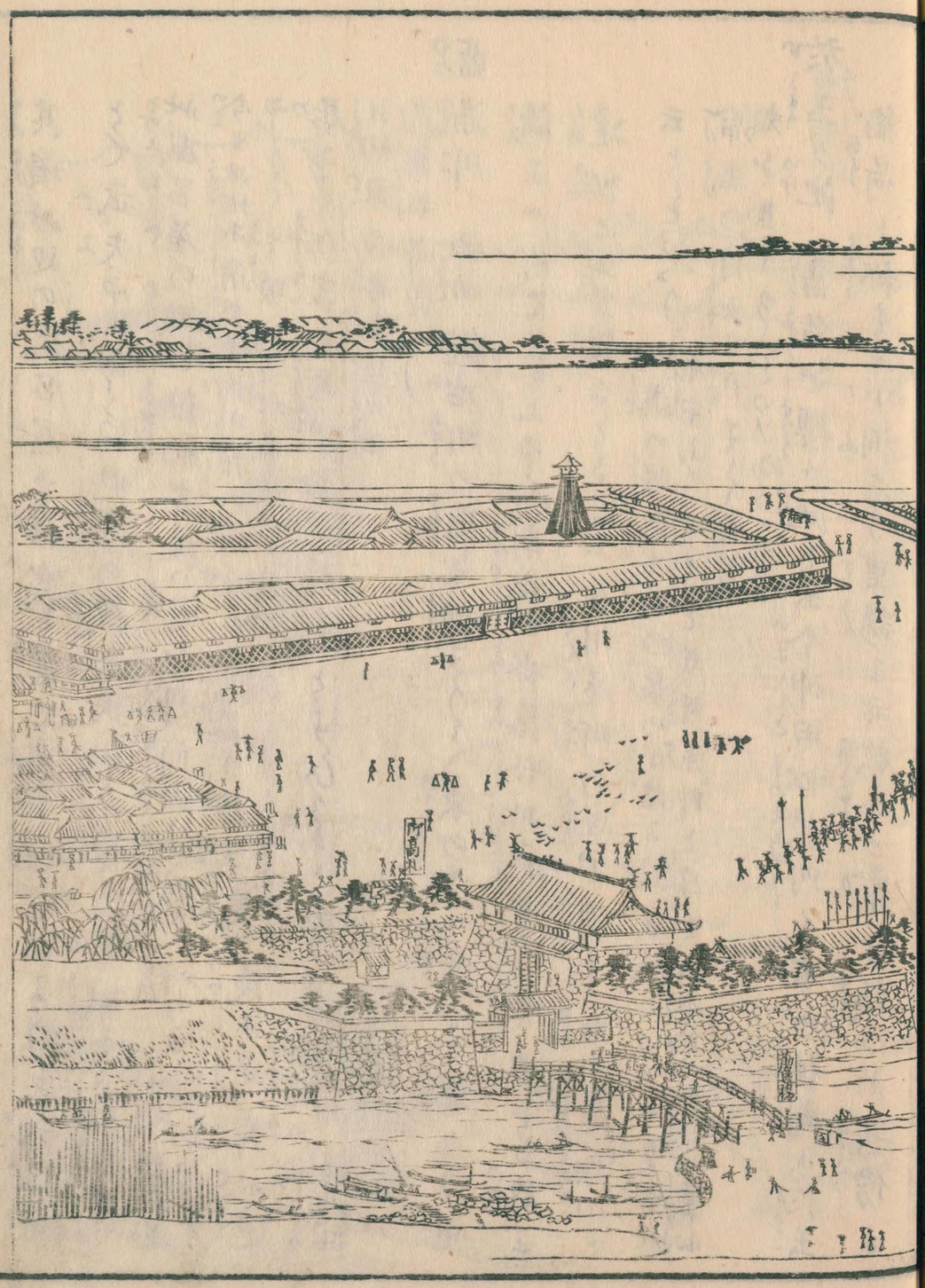
丹後殿前　雉子町の北の通りをいふ　昔此地ゆ堀丹後守殿の弟宅

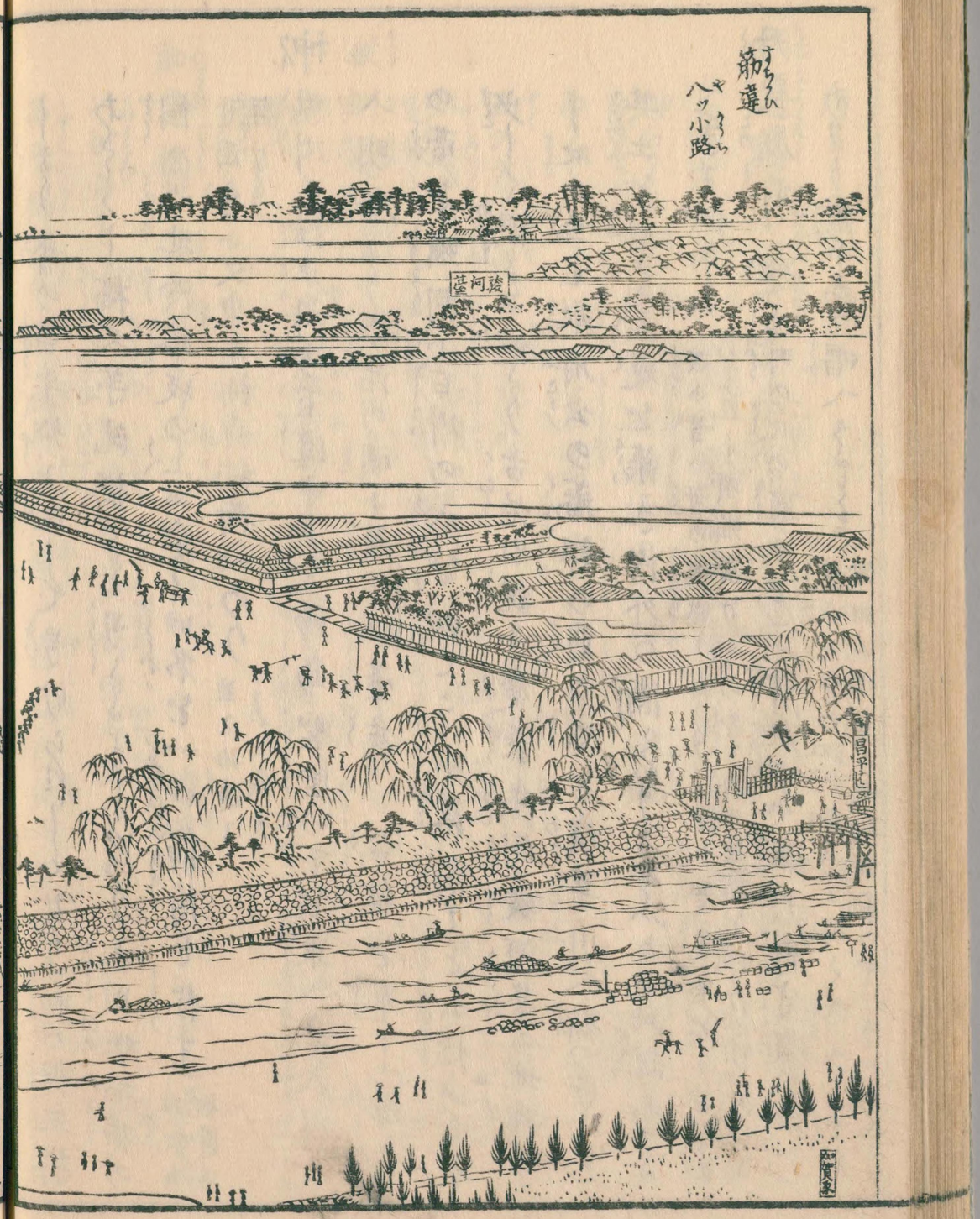
ありしゆ因て号くと考へよ　今ハ

覧永九年の江戸繪図よ津田山州侯の地則堀家のやしきの跡

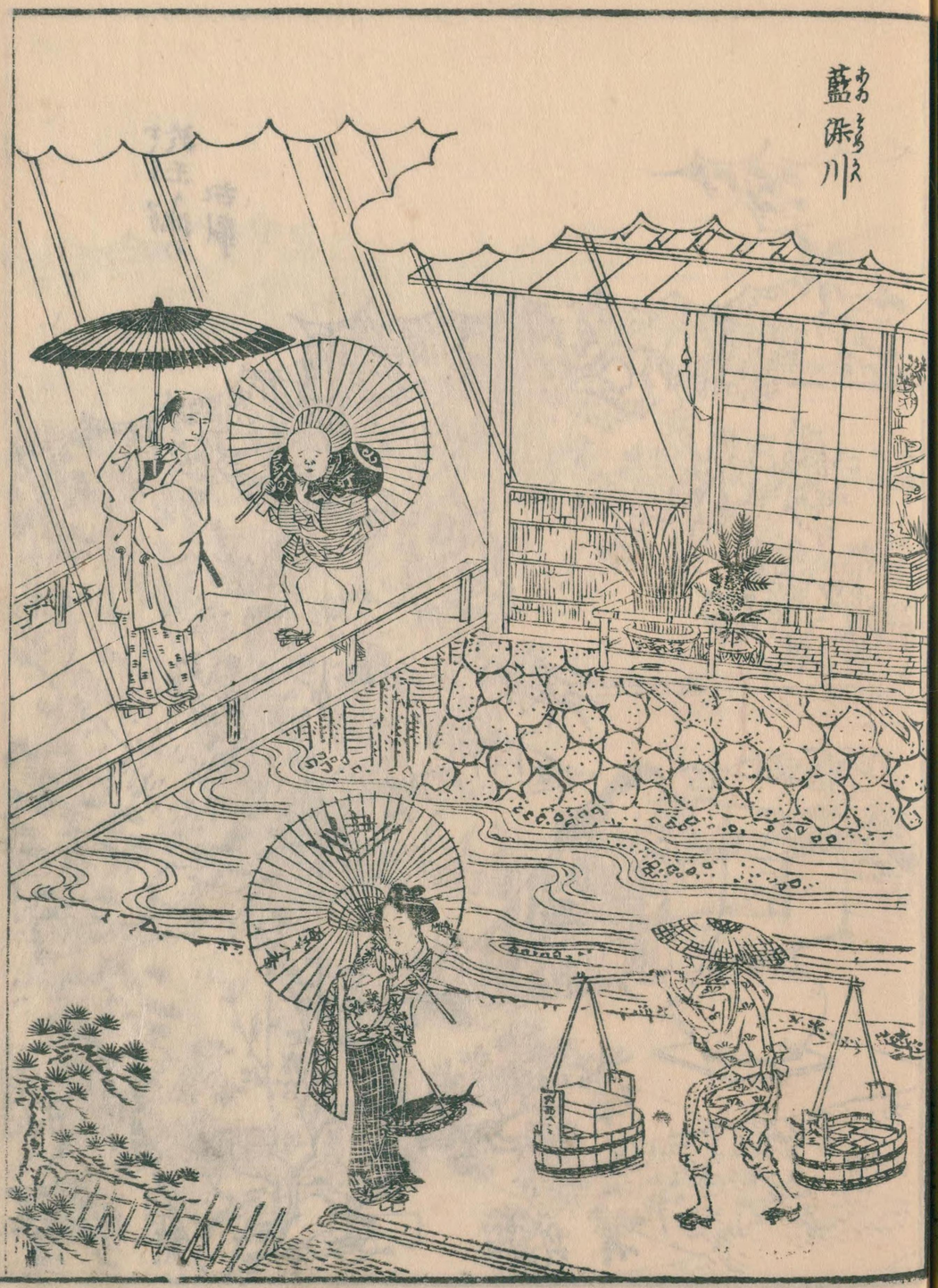
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



藍染川

其頃此辺の風呂屋ゟ湯女を置て客を招しより又六法組
とそ武夫やもあゝ壮年の俠夫大小立髪の異風ある出立ゟて
此風呂屋の辺を徘徊せしハ是を丹前六法風と呼ける
今も此地ゟ清水屋掘川林云湯屋あり則昔の湯女風呂
ゆゑしく頃ハ清水風呂掘ゟ風呂と称へしとなり
居ゆく狂言ゟ取組名も丹前とよひるとなり
白柄組 鉄棒組 唐犬組
荒羅組 等かり

藍染川 神田鍛冶町の通を横さりくに東の方へ流るゝ溝あり里
諺ゟ一町そゟ上ゆく南北の水落合此所ゆく會流るゝ故ゟ
逢初と云の儀ゟとるとゝ云又相屋町の辺を流るゝ故ゟ藍染川と
云とゝもとり 北溝の端鍛冶町の裏の小路ゟ銀善院と
帰潮の侍女ゟ代まゝく自う 庵室あり本ぐるを頬焼茶師と字る此本ぐる昔ゟ薬師
頬を焦しのゆゑハせり
於玉ゟ池 舊名を櫻ゟ池と云今神田松枝町人家の後園ゟ於玉
稲荷と称る小祠あり里諺ゟ云於玉ゟ霊を鎮ると其傍ゟ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

小く井のあとき形残りより昔の池の余波なりとぞ
世の人の漸くふ埋滅してかくのことなりより江戸の繁昌よりそ往古を
傳云昔此地ハ奥州への通路ゆく櫻樹あるそ依りて名よりしとそ其傍の櫻樹のもとふ玉とゝもむ容色大そうつくしかりけれハ心ときなりきとそ中頃人うゝも品形も拙き男二人をかの女よ心を通ハせけるされハ切なる方やを思へともまことりもあらさりけれハ我身のうへを思ひあつらひく女ハ終よ此池よ身を投くむやく津の國の求塚の古ことのふ似くともあれるをいとゝく里民打寄くとむらひ辺よ埋みもるしもとゝく柳を植くしより其舊址明暦の回録よりひろまりこの橋ふ架せりこの橋ふ池とそ今ハ名のみ呼あつらへりとそ記念の柳とハ号くると云く

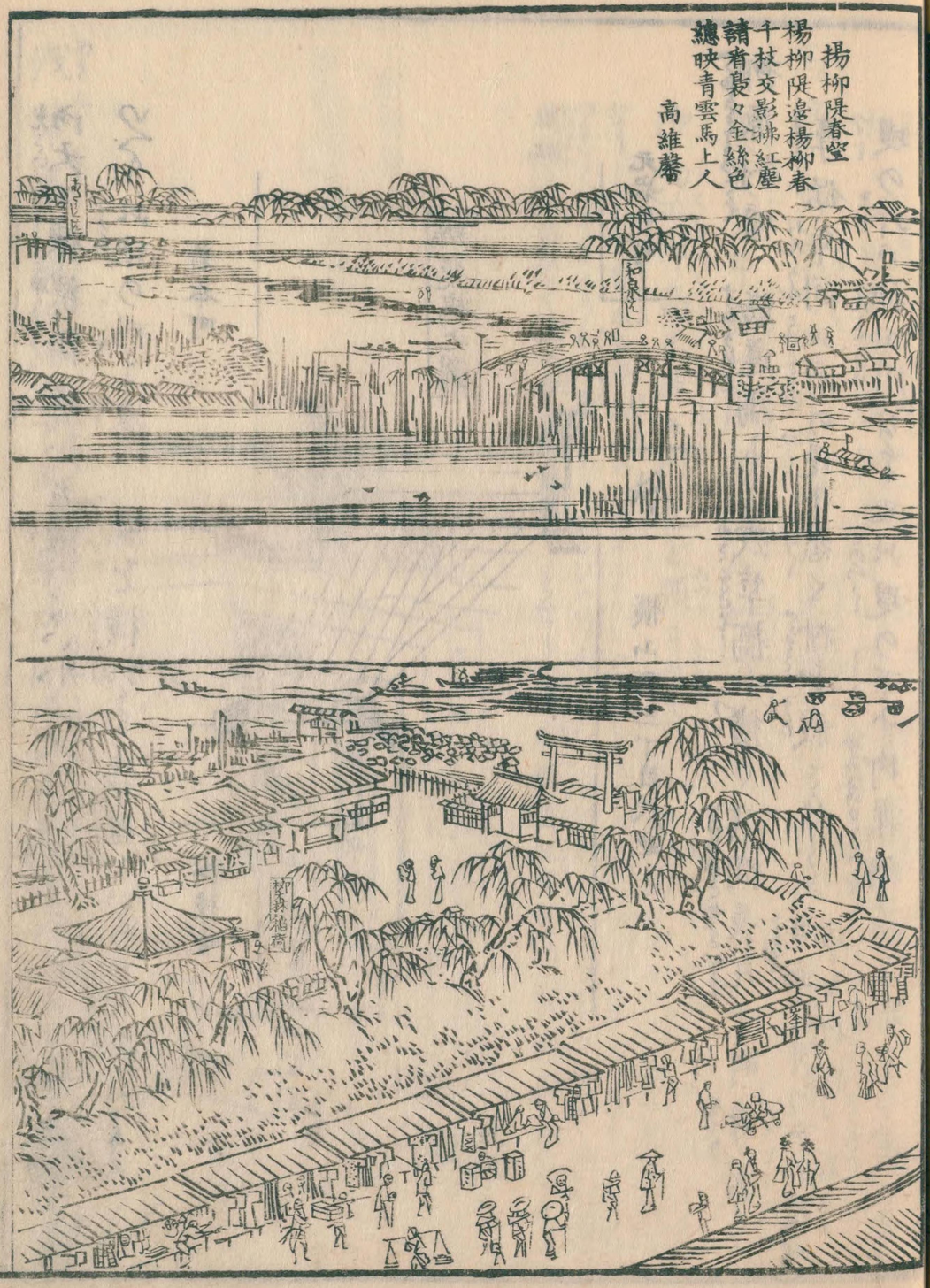
弁慶橋　同所東の方和泉橋の通藍染川の下流よ架す　其始

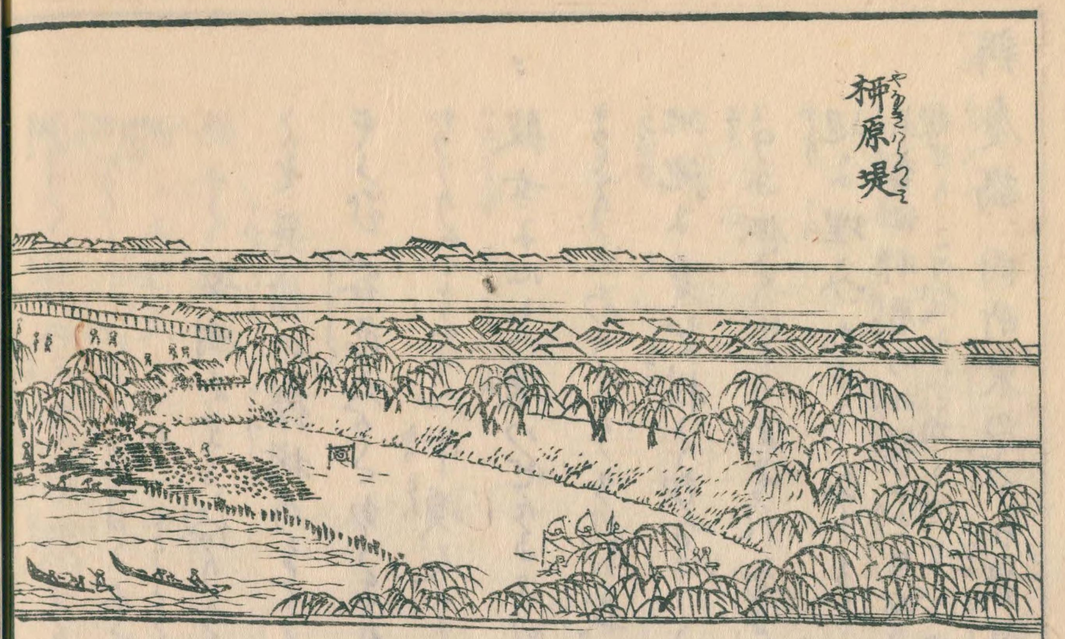
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

楊柳隄春望

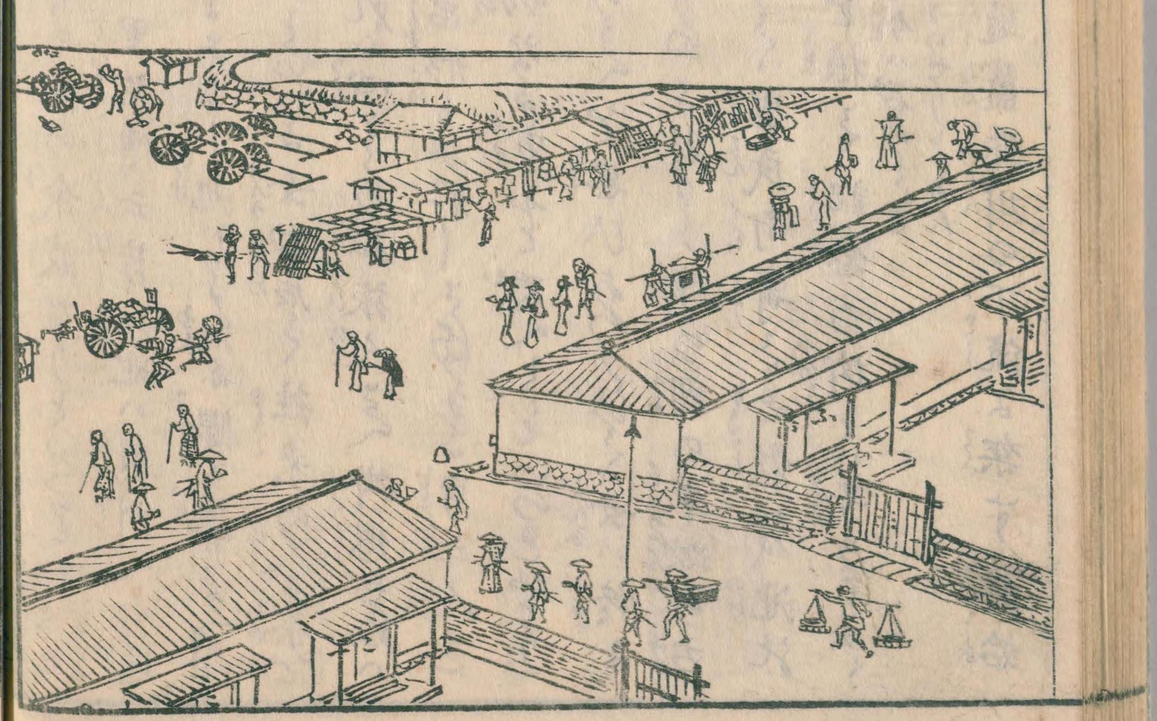
楊柳隄邊楊柳春
千枝交影拂紅塵
請看裏々金絲色
總映青雲馬上人

高維馨



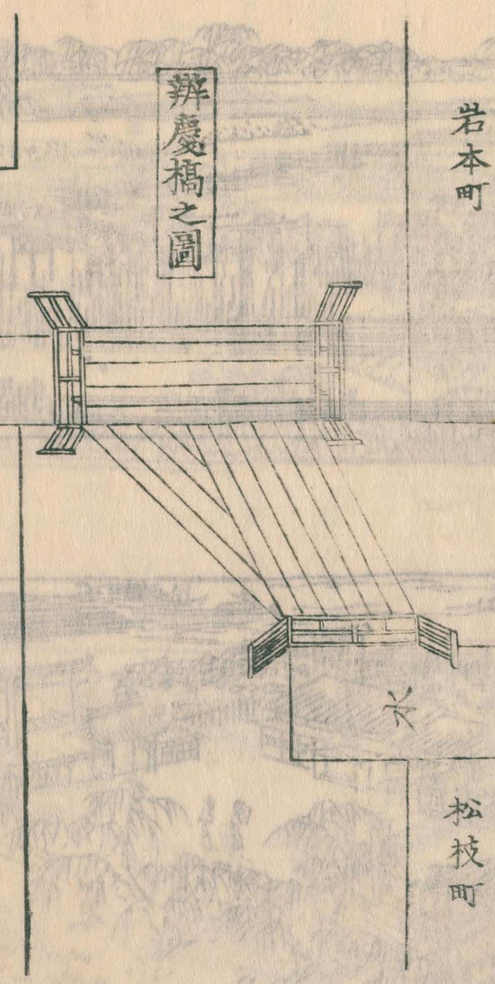


柳原堤



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用



此大工棟梁辨慶小左衛門といふる人のかりそめに此地の形よき懸り橋を積けるに筋違橋よりかる尤奇なり

抑原封壇　筋違橋より浅草橋へ續く其間長凡十町斗あり

享保年間此所の堤ふ悉く柳を栽させらるる　寛永十一年の江戸繪圖にも柳堤とあり

堤の外ハ神田川なを又此堤の下ふ柳森稲荷と称する叢祠あり

故よ此地を稲荷河岸と呼へり　昔ハ神田川の南北とふ

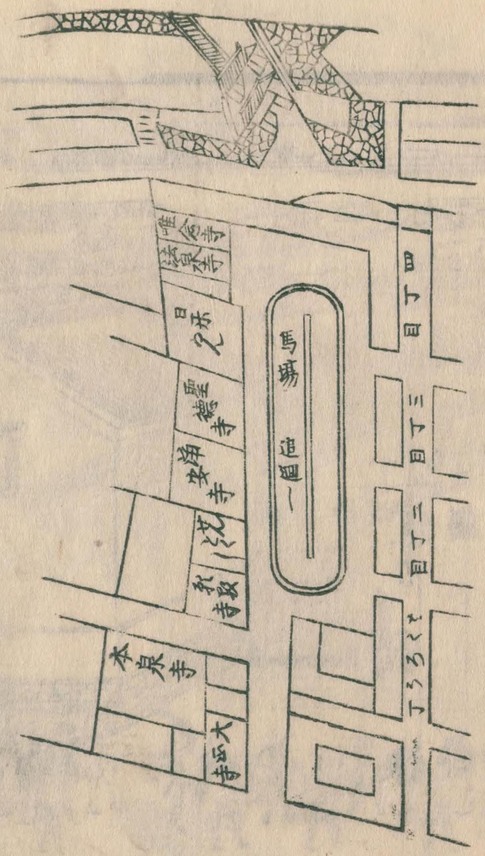
馬場　馬喰町三丁目の西北の裏通よりあり江戸馬場の中最ふ古し

慶長五年関ヶ原御陣の時御馬揃ありしと云伝ふ

御馬工郎高木源吾衛是を預りける　此地を馬喰町とも此辺ハ昔ハ富田半七と高木源吾衛と両人

寛永廿年開板のあまめかりと云る草紙よりハ月毛鹿毛の馬もありひハ月毛ハ皆せけ侍ありしと云傳ふ

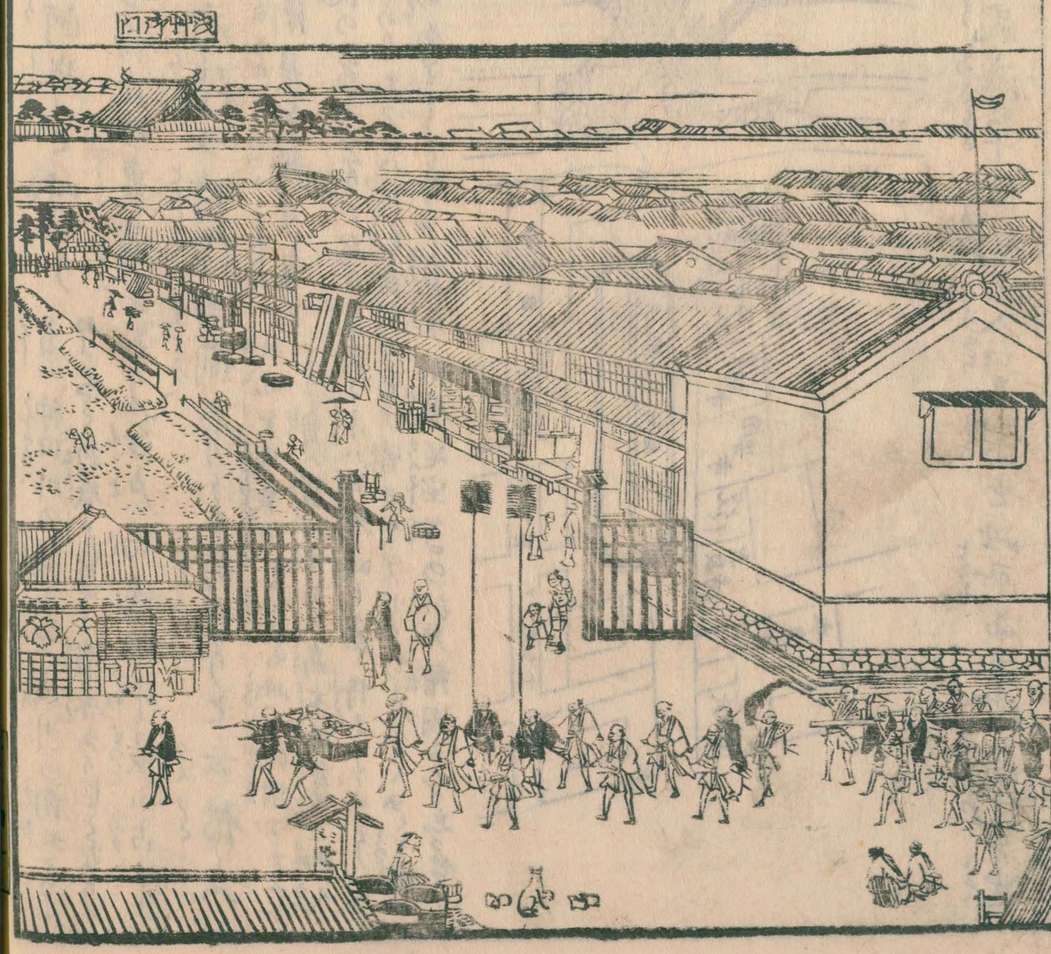
追通ーとのひく左のごとき形なりしと寛永明暦延宝の江戸繪図よりも考へり

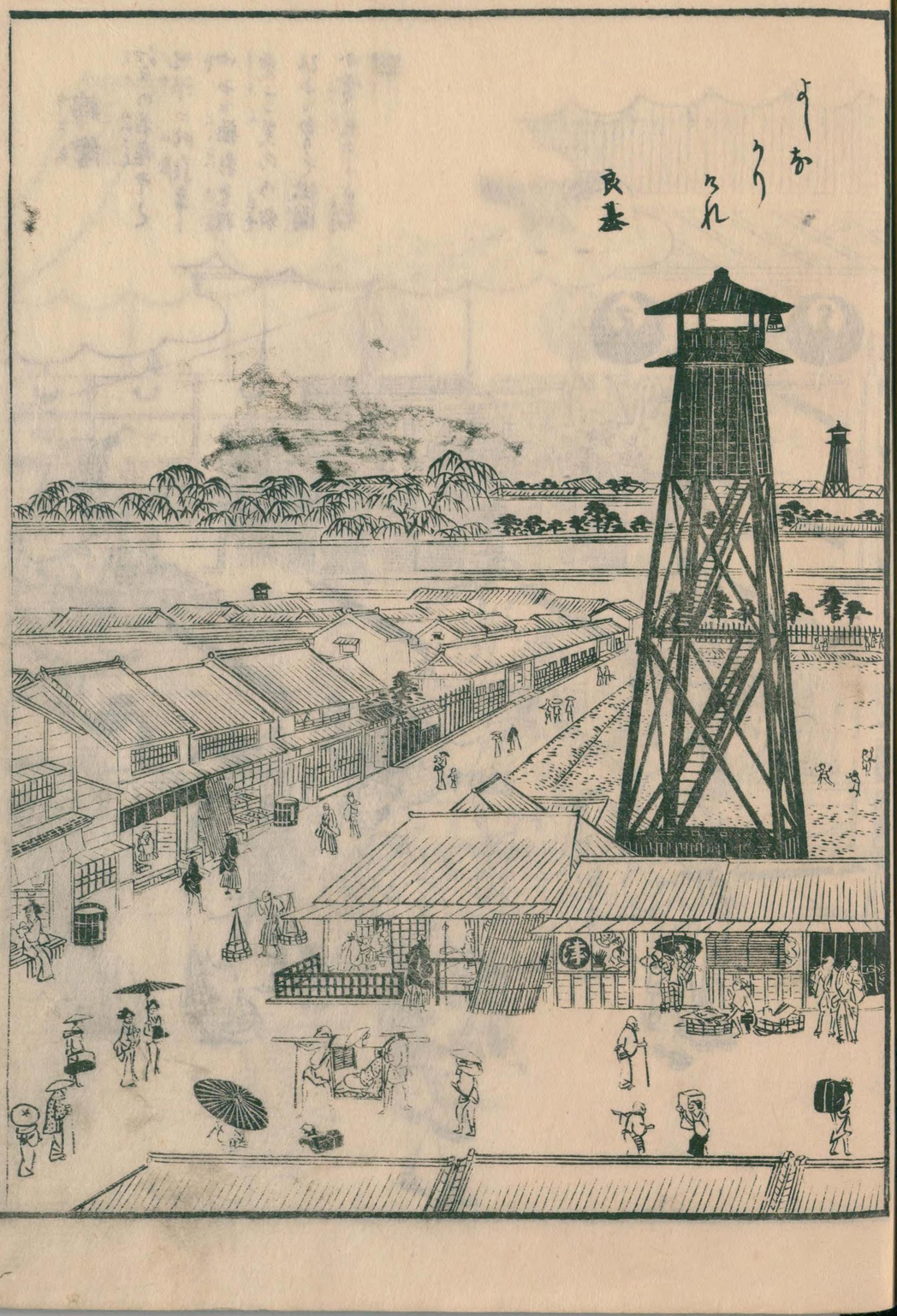


浅草橋　神田川の下流浅草御門の入口よ架せ此所ふも御高札を建

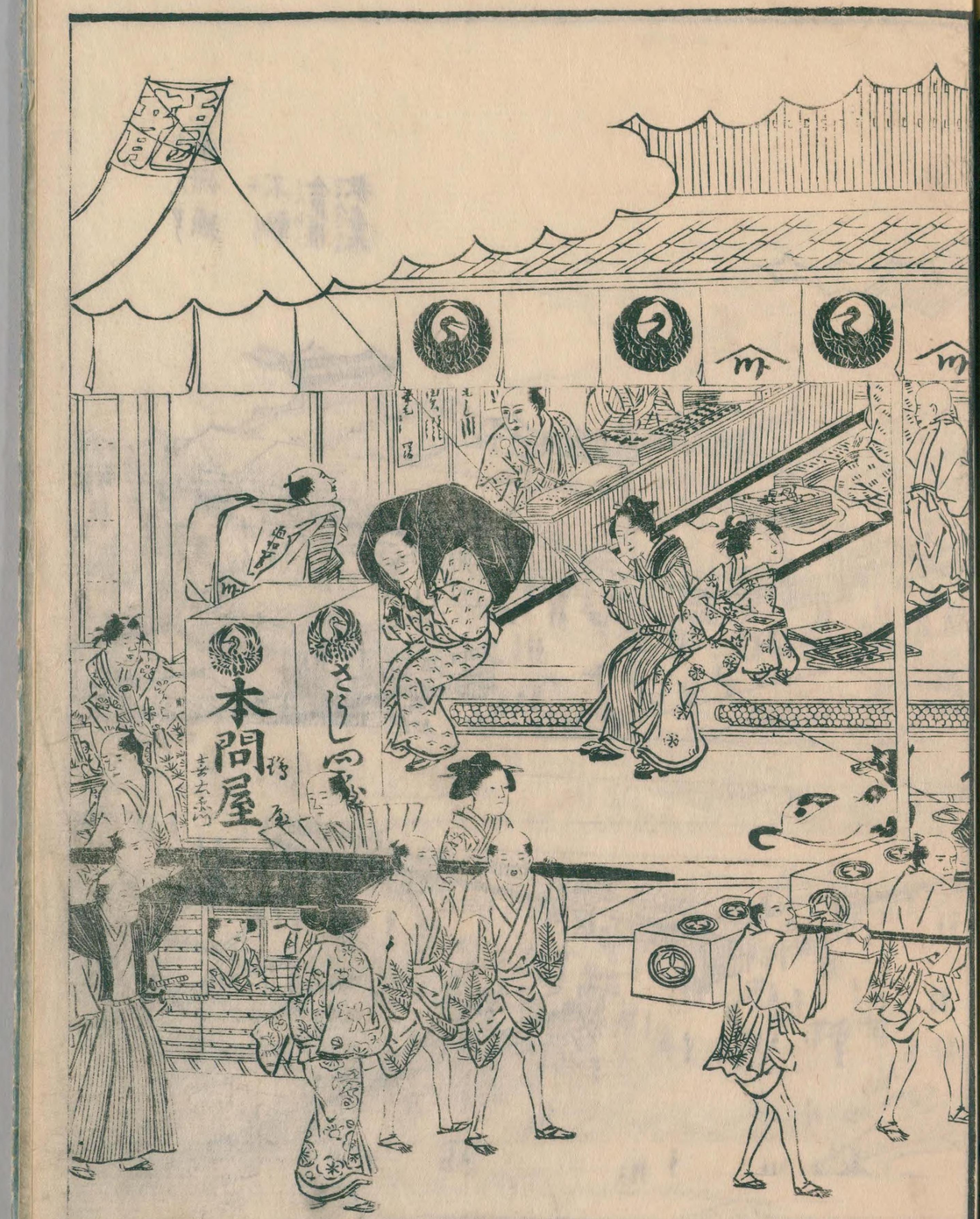
馬喰町馬場

鶴岡放生會職人芳谷
博労遠





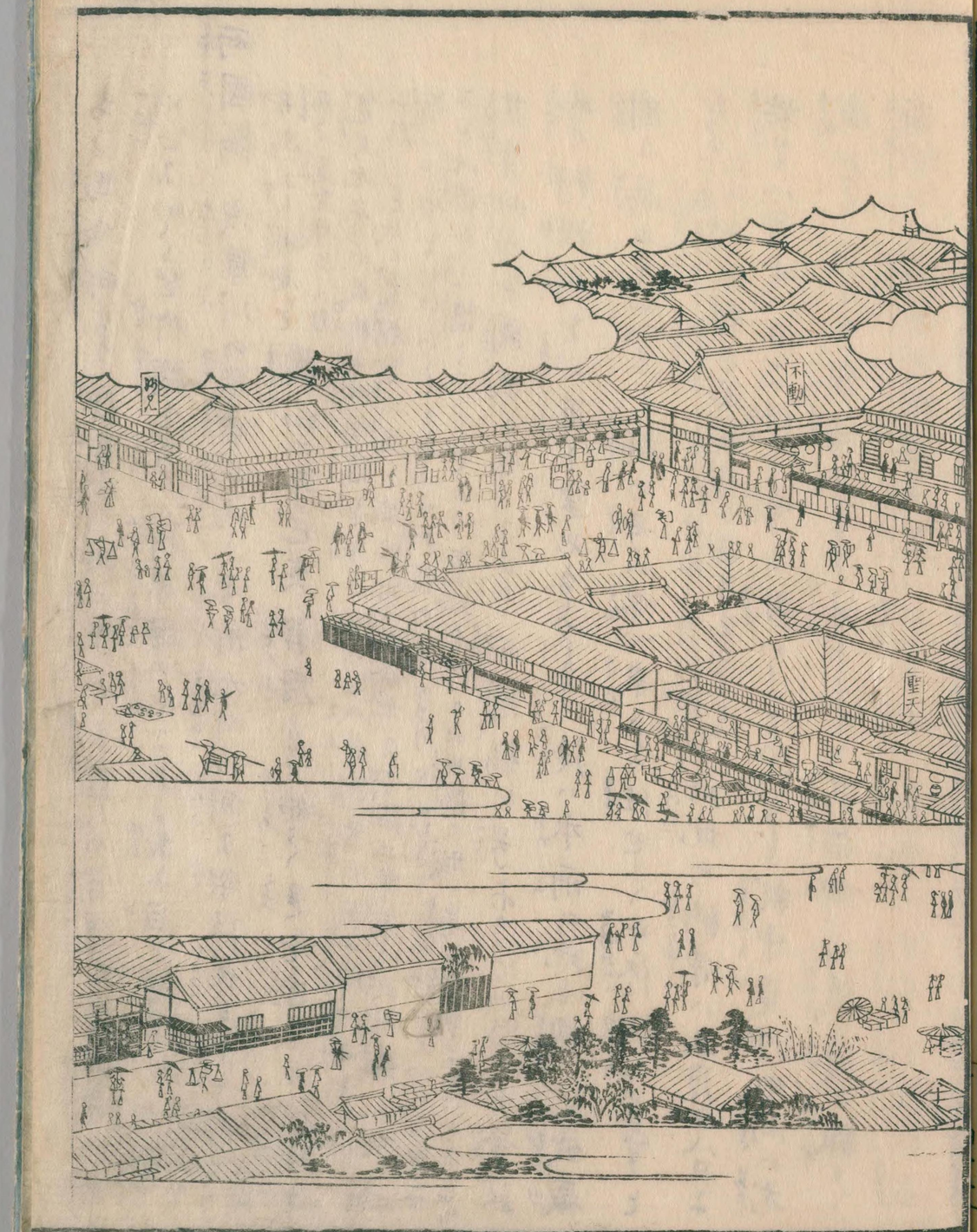
良春

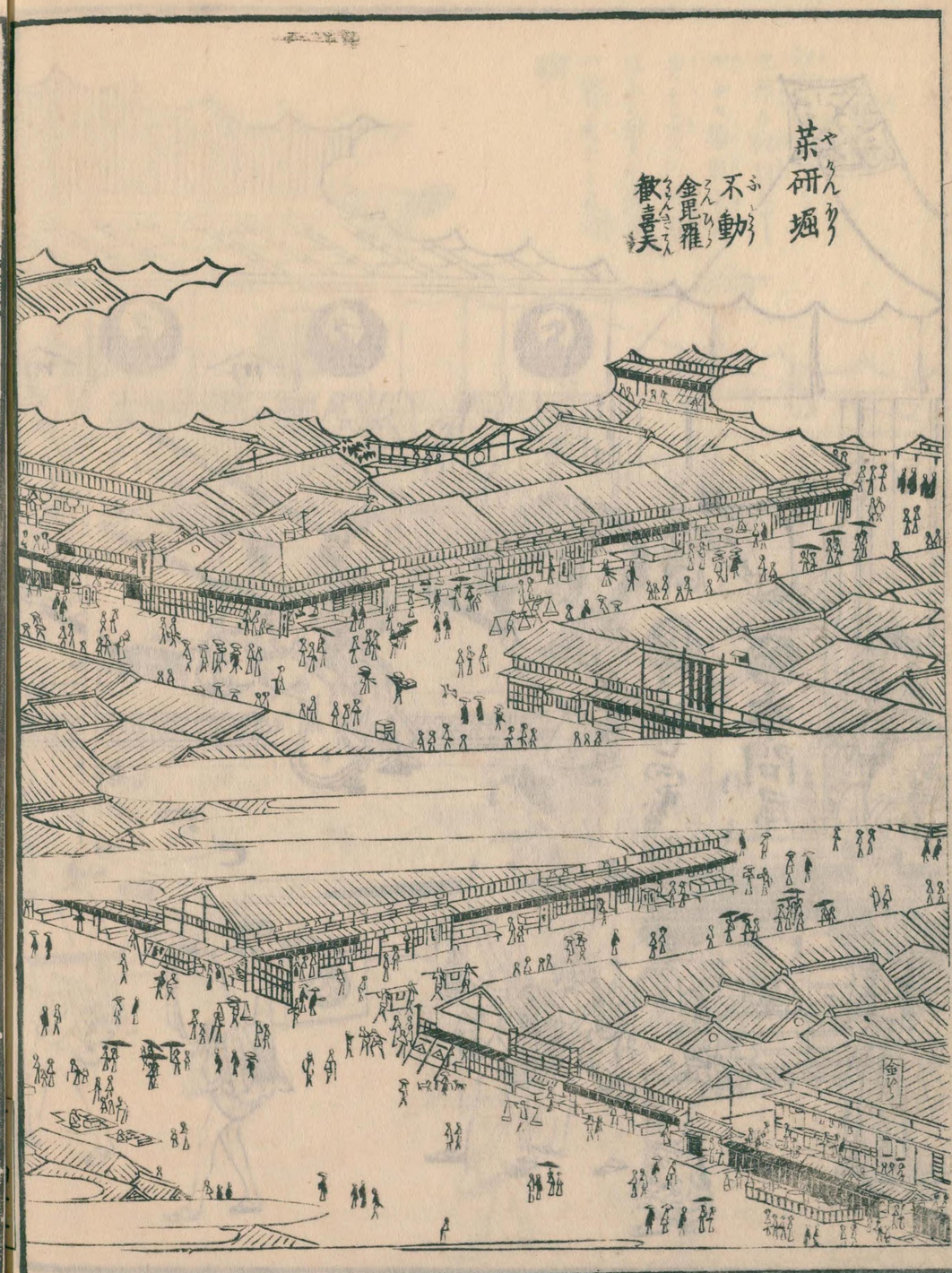


錦繪

江戸の名産中て
他邦ふ比類多
由中も極彩色珠
更ら此の乃類
ひやもありて拙國
ふ賞美せる事
歟ー

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

839
20
57

らる馬喰町より浅草への出口ゆゑく千住への宮道なり此東の大川口よりかくを柳橋と号く柳原堤の未よりある者ゆゑ名ともるこゝ此の貸舟あり

両國橋　浅草川の未吉川町と本所元町の間ゟ架く長九十六間橋の前後并橋上ゟ番屋を置く是を守らしむ萬治二年己亥官府ゟ普請奉行芝山平内両氏命せられしと云く書名を大橋と号く事蹟合考ゟ方治二年東の大川筋ゟ始く大橋と号く此橋のなもあるゟ此橋一ヶ所をかけらるゝとあるゟ此橋の形ハ扇を開きるふうなるこゝ或ハ諸方へ通ずるゟ云ふ又寛文元年辛丑新ゟ両國橋を架しめらるゝ故ゟ普請奉行芝山平内両氏命せられしと云く書名を大橋と号く事蹟合考ゟ方治二年東の大川筋ゟ始く大橋と号く此橋のなもあるゟ此橋一ヶ所をかけらるゝとあるゟ此橋の形ハ扇を開きるふうなるこゝ或ハ諸方へ通ずるゟ云ふ又其昔此川を國界とせしゟより両國橋の号ありといふことを今ハ其ゟ後ハ本所の地も同しく武蔵國ゟ属せしめらるゝとぞ

國ゟ属せしゟより橋の号ハ唱へ来るまゝ任せく改らるゝすと

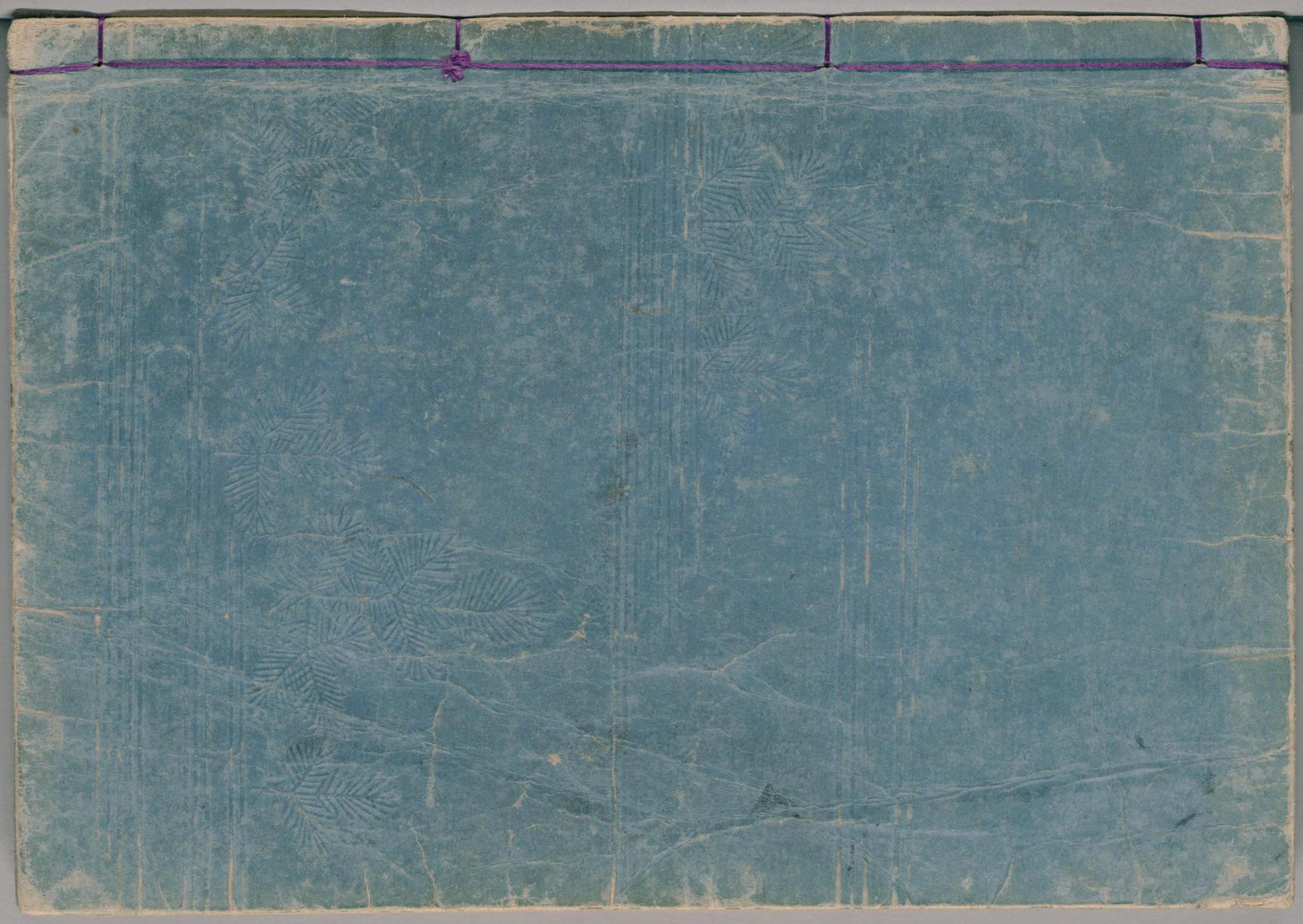
なりの西を割く武蔵國ゟ属せしめらるゝとぞ

始ゟ八月廿八日ゟ終る常ゟ賑ハしくとの

盛なり陸ゟ観場ゟせき計ゟしく其招牌の幟ハ風ゟ飄く

扁飛ゟ両岸の飛楼高閣ハ大江ゟ臨を茶亭の床几ハ水辺に立

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用